

Technological Grammatization and psychic apparatus
-- 〈テクノロジーの文字〉と〈心の装置〉 --

Return to Freud

フロイトへの回帰

Hidetaka Ishida
石田英敬

「人間は生まれながらにして自由である、しかし、いたるところでネットにつながれている。」

私の研究

「メディア」を理解する

〈メディア〉の記号論



石田英敬『記号の知/メディアの知
日常生活批判のためのレッスン』（東京大学出版会、2003年）
<http://www.utp.or.jp/book/b298828.html>

石田英敬『大人のためのメディア論講義』（ちくま新書、2016年）
<http://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480068712/>



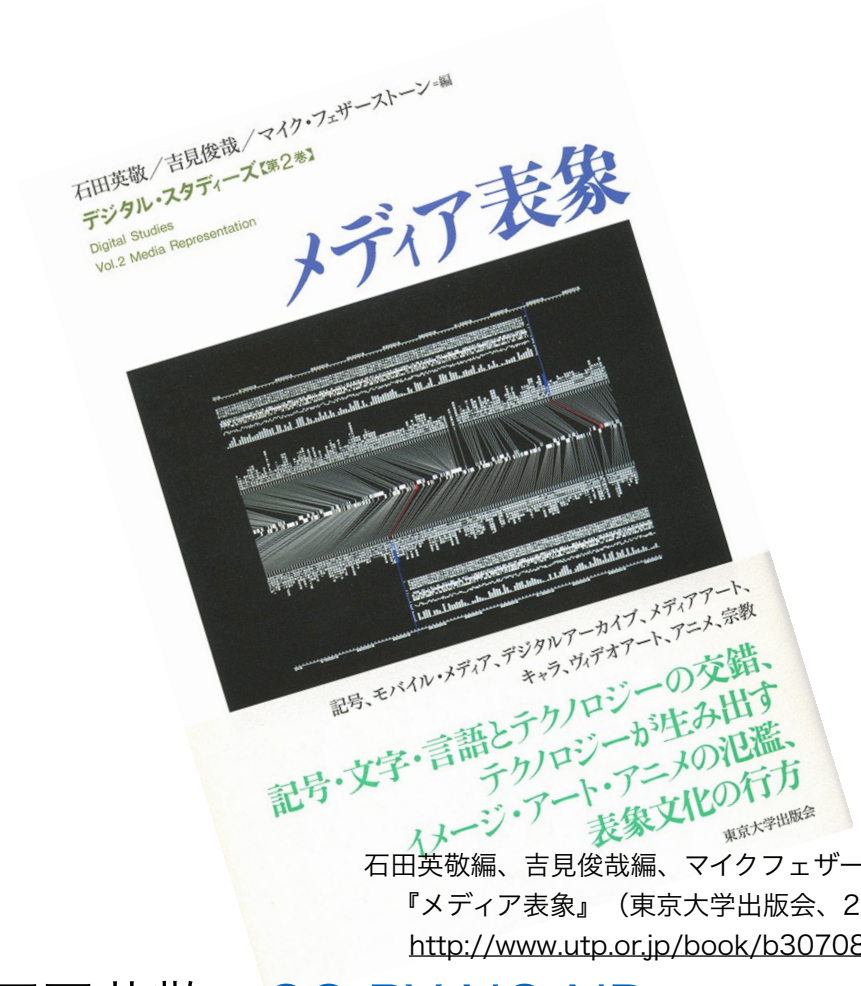
私の研究

「メディア」を理解する

〈デジタル・スタディーズ〉



石田英敬編、吉見俊哉編、マイクフェザーストン編
『メディア哲学』（東京大学出版会、2015年）
<http://www.utp.or.jp/book/b307060.html>



石田英敬編、吉見俊哉編、マイクフェザーストン編
『メディア表象』（東京大学出版会、2015年）
<http://www.utp.or.jp/book/b307081.html>

「メディア」を理解する 〈俯瞰講義〉や〈横断プログラム〉

東京大学大学院横断型教育プログラム

Digital Humanities

<http://dh.iii.u-tokyo.ac.jp/>

Home Program How to Apply Resources News Contact Us

デジタル・ヒューマニティーズ
DIGITAL HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF TOKYO

12単位以上の取得で、東京大学から修了証が授与されます (大学院学生対象)

デジタル・ヒューマニティーズとは

デジタル技術は、人間の知的資源の保存、研究、発信の方法を大きく変えて、情報社会の新しい知識基盤を形成しています。この変化に対応すべく、デジタル媒体による学術資料のアーカイブ構築、文化コンテンツの分析、学術成果の公開や展示の方法などを、文系・理系の枠組みを横断して研究するデジタル・ヒューマニティーズの動きが世界的に広がっています。本プログラムは、デジタル技術を用いたヒューマニティーズの新しい方法とともに、情報学を文化資源の構築に活かしていく方法を広く学びます。

もっと詳しく

Tweets by @TodaDHP

更新履歴

2016.9.28
平成29年3月末修了者の修了証申請手続きを、10月3日(月)から10月31日(月)に行います。詳細については、「[部局横断型教育プログラム 平成29年3月末修了者の修了証の申請について～お知らせ～](#)」及び「[プログラム登録画面](#)」を参照し、該当者の方は修了申請手続きを行ってください。

2014 Winter Term

Information: New Knowledge on “Reading and Writing”

<http://www.gfk.c.u-tokyo.ac.jp/archives/948?lang=en>

[Japanese Page](#)



Click to enlarge

2014 Winter Term

Information: New Knowledge on “Reading and Writing”

Coordinator: Hidetaka Ishida (Assistant Director of Library System / College of Arts and Sciences)

Navigator: Takuya Abe (Interfaculty Initiative in Information Studies)

Information

“Reading and writing” are fundamental motions of memory, thinking, and recognition. Research is currently being conducted in a variety of academic fields into the actions of reading and writing, even by computers and robots, and also into how people, animals, and other entities perform the actions of reading and writing.

In these lectures, we welcome a group of instructors who are forerunners in leading fields of knowledge, from the humanities to information science, from robotics to cognitive science and neuroscience, and from studies of characters and books to information design studies. We would like to investigate with you the forms of “new knowledge” that surround the actions of reading and writing.

What is “Reading and Writing”? (Introduction)

Lecture 1 10/14

Hidetaka Ishida (Assistant Director of Library System / College of Arts and Sciences)

Overview: “Reading and writing” are human actions that form the basis of the knowledge we call literacy. For a long time, human knowledge was formed by “character” literacy through the medium of “books”. However, technology that goes beyond characters and books in the narrow sense has now become capable of creating knowledge. With these lectures, we would like to consider with various instructors the problems of “new knowledge” raised by these forms of new knowledge technology. The first lecture presents an introduction to the problems of new knowledge.

Reading and Writing by the Brain

Lecture 2 10/21

Digital Humanitiesについて

Digitus Dei est hic !



from Wikipedia Commons

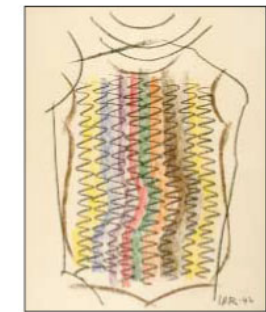
Roberto A. Busa

During World War II, between 1941 and 1946, I began to look for machines for the automation of the linguistic analysis of written texts. I found them, in 1949, at IBM in New York City. Today, as an aged patriarch (born in 1913) I am full of amazement at the developments since then; they are enormously greater and better than I could then imagine.

Digitus Dei est hic! The finger of God is here!

from Wikipedia Commons

http://digitalhumanities.org:3030/companion/view?docId=blackwell/9781405103213/9781405103213.xml&chunk.id=ss1-1-1&toc.depth=1&toc.id=ss1-1-1&brand=9781405103213_brand
Copyright © 2004 by Blackwell Publishing Ltd



A COMPANION TO
*DIGITAL
HUMANITIES*

EDITED BY SUSAN SCHREIBMAN,
RAY SIEMENS, AND JOHN UNSWORTH

 Blackwell
Publishing

I

Universal Library and WWW

“The universe (that others call the Library)”
Jorge Luis BORGES

著作権等の都合により、

ここに挿入されていた画像を削除しました

書籍の表紙

THE LIBRARY OF BABEL

n. 〔修辞〕 誇張法：大げさに感情を表現すること；しばしば，おどけた表現をする場合に用いる；
例 Then I'll wait an eternity. Millions of thanks!

Ⅰ 〈超-グーテンベルク〉 期

いま世界では果てのない〈普遍図書館 Bibliotheca de Babel〉が建設中で、人びとは〈顔の本Facebook〉によるお見合いで知り合い、〈家庭の頁homepage〉を単位に日々の暮らしを更新し、毎分のように文字列を〈呟きtweet〉合って生活している^[2]。ほとんどの日用品は〈本屋Amazon〉が運んでくる。本屋が運んでくるモノはすべて〈本〉として分類され、世界全体が〈机の上desktop〉になり、本の数は日々爆発的に増殖し世界の机の上が異様に散らかっている。

二十世紀には「グーテンベルク銀河系」のまぢかな終焉が預言されていた。だが、訪れたのは、〈超-グーテンベルク〉期である^[3]。

あらゆる生活場面で人びとは、〈本〉を読んでいる。地下鉄にのると、どの車両でも乗客は〈私本アイホン〉などの〈賢明本スマートホン〉を読んでいる。街角では、皆が古代ギリシャ人さながらに、〈私板iPad〉を持ち歩いて、カフェに腰をおろして、〈汝管YouTube〉をのぞき込んでいる。超-グーテンベルク期とは、ひとびとが寝食を忘れ、本を読むことも忘れて本を読むまでに本の文化が異常発達をとげた〈新人類期 Anthropocene〉なのである。

石田英敬「新『人間知性新論』 〈本〉の記号論とは何か」,
『ハイブリッド・リーディング 新しい読書と文字学』
日本記号学会編 新曜社、2016年刊, pp.82-101

〈普遍図書館〉計画

〈本〉と〈頁〉と〈文〉と〈字〉と〈手紙〉と〈飛脚〉と〈本屋〉と〈モノ〉と〈図書館〉を連ねる〈隠喩連鎖メダフォール・フィレ〉が現実化した世界を私たちは生きている。

すべての発端は、十八世紀の哲学者による「知性の改革」計画だった。その基礎学は「普遍記号論 Characteristica universalis」と呼ばれ、「計算機」が試作された。しかし二十世紀には、軍事戦略的位置づけをえて「知の暗号化」計画として推進され、暗号無線技術にもとづく「暗号論」が普遍記号論の主流となった。

二つ目の大戦後は、書斎に戻った元原爆開発者が、原爆を組み立てることができる〈勉強机Memex〉を自宅で組み立てることを考案した。核弾頭の到着よりも早く弾道計算を行える計算機が設計され、「計算とは他の手段による戦争の継続である」という抑止論が唱えられた。

この〈冷たい戦争〉の終結ののち、使用済みになった〈計算機〉の再利用のために、連邦政府は「図書館の平和利用」を唱え、世界の図書館の電算化を進める、〈普遍図書館〉計画が推進された。

二十世紀の〈普遍図書館〉計画は、ブエノスアイレスの図書館長でもあった南米の盲目の作家がフィクションとして描いた構造図をもとに、数学者と計算機学者の参加をえて具体化し、スイスの原子核研究所の物理学者たちの読書会のための超文書共有サービスとして最初の実用普遍図書館が実装された。

今では、Alphabetを名乗る図書館業務会社が世界最大の企業で、その出発点は、その名も神の摂理を帯びた神童、頁 (Larry Page)クンが、石渡Stanford大学の新図書館計画のために考案した、〈頁〉探しのための〈索引(indexing)技術〉の開発だった。学位論文の最初の頁に、彼は次のように書いている。

この紙でできた論文は、どうしたら、[ボクたちの図書館の全ての本の網羅的な読み方の〈索引〉をつくるために]、超文章のなかにある、[図書館閲覧者が残す、落書きや下線や書き加えや頁の折り目や鼻くそ目くそなどの読書跡などの]追加情報を活用できるようにする大規模な実用システムを作れるかを検討したものなんだ。ボクたちが、さらに、考えようとしたのは、誰でもが何でも出版できるようになっちゃっためちゃくちゃなこの超グーテンベルク期の世界で、このでたらめな超文書の寄せ集めのなかからどうしたら自分が読みたい頁を探し出したらいいのか、超-図書館における頁の探し方の問題にチャレンジしようとしたものだ。 [4]

[4] Sergey Brin and Lawrence Page *The Anatomy of a Large-Scale Hypertextual Web Search Engine*

Computer Science Department, Stanford University, Stanford, CA 94305

<http://infolab.stanford.edu/~backrub/google.html>

頁クンが興した企業〈二乗百度(Google)〉の試算によると、人類が残した全書籍1億3千万点、その二割五分以上がいまでは、この普遍図書館に納入された^[5]。〈万有百科検索〉が検索できる超頁数は、三千五十五億頁で、トルストイの『戦争と平和』二億一千二百万冊分、日々刻々と更新され増殖しつつ、頁が頁を読み合っている^[6]。

なぜDigital Humanitiesか

続きは以下をお読みください。

<http://nulptyxcom.blogspot.com/2018/06/blog-post.html>

石田英敬「新『人間知性新論』 〈本〉の記号論とは何か」
『ハイブリッド・リーディング 新しい読書と文字学』
日本記号学会編 新曜社、2016年刊, pp.82-101



なぜFreudへの回帰か？

II

Return to Freud

〈メディア人間〉の時代

from Wikipedia Commons

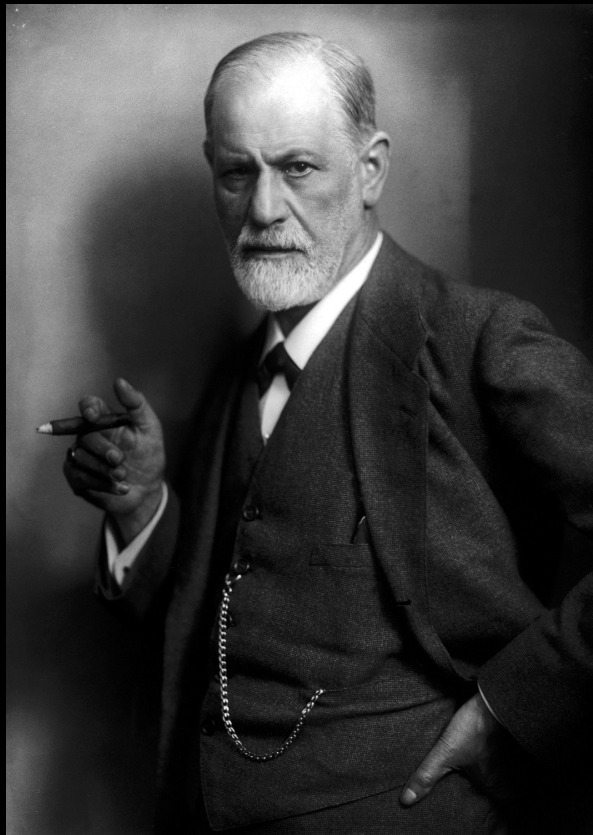


リュミエール兄弟の最初のフィルム「工場からの出口」(1895年12月)

〈文字の問題〉から考える

文字の変化

テクノロジーの文字と〈心の装置〉



from Wikipedia Commons

著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除しました

オックスフォード大学所蔵
プラトンとソクラテスの絵画



石田英敬『大人のためのメディア論講義』（ちくま新書、2016年）
p17

どんな補助具か？

補助具をつけた神

人間はいつてみれば一種の**補助具をつけた神**、補助器官を
まとえばたしかに目覚ましいが、人間とともに成長した
わけではなく、しばしば危難を人間にあたえる**補助器具**
をまとった神となった。

フロイト 「文化の中の居心地悪さ」 (1930)

フロイト全集 第20巻

石田の年表「記号論と二つのメディア革命」

アナログ革命

書き込みシステム1900

マスメディア

大衆社会

大衆文化

書き込みシステム1800

グーテンベルク銀河系の終焉
the End of the Book

デジタル革命

書き込みシステム2000

文化産業

消費社会

ポピュラー文化

情報産業

知識社会

W.W.W. Cultures

バロック記号論

Leibnitz and Locke



ライプニッツ ロック

現代記号論

Saussure and Peirce



言語学モデル

記号学 / 構造主義・ポスト構造主義

情報記号論

Informatics/ Cognitive Sciences

Neurosciences/ Nano Sciences

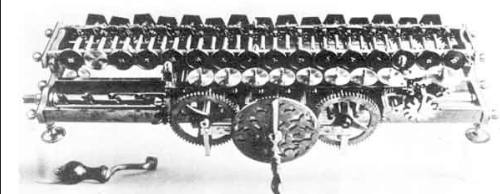
知のデジタル転回

17~18th C

19~20th C

1950

21st C



石田英敬『大人のためのメディア論講義』（ちくま新書、2016年）
p116 図4-1二つのメディア革命と記号論の歴史

【世界の変化】

書物（印刷）の時代

→人間の意識を経由したものだけが文字になる

アナログメディアの時代

→機械が文字を書く（写真、レコード）。しかし
その意味の判断や批判はまだ人間がおこなう
（記号論など20世紀の学や文化産業の登場）

デジタルメディアの時代

→機械が文字を書き、その判断の活動も、
機械が代行する→人文科学・社会科学etc..の知
の危機：「人間」の「終わり」の予感

文字テクノロジー

●文字 **Graph / Graphy**

→graphein (ギリシャ語 γράφειν) (書く)

●活版印刷術 **Typography**

→typo (型の) - graphy (文字)

●写真 **Photograph(y)**

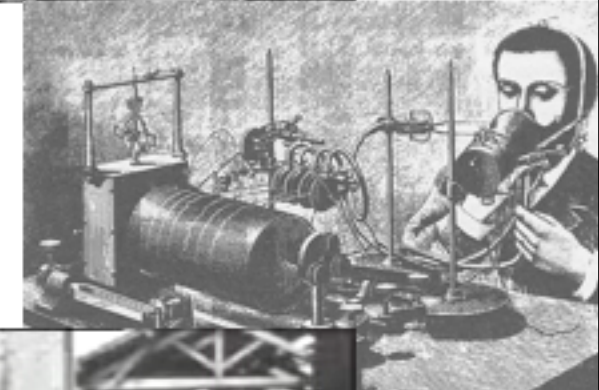
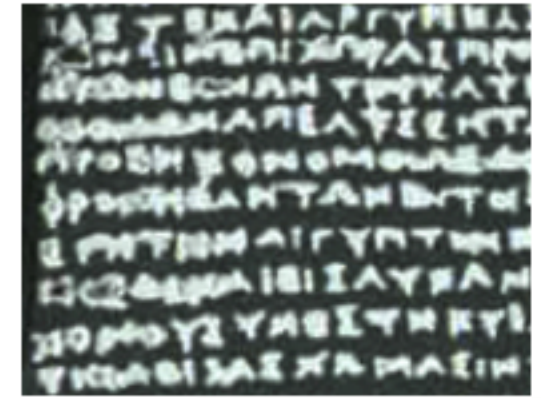
→photo (光の) - graph (文字)

●レコード (蓄音機) **Phonograph / Gramophone**

→phono (音声の) - graph (文字)

●映画 **Cinématographe**

→Cinémato (運動の) - graphe (文字)



遠隔テクノロジー

●腕木式通信 テレグラフ **Télégraphe**
→télé（遠隔の） - graphe（文字）



●電話 Telephone
→tele（遠隔の） - phone（音声）



●テレビ Television
→tele（遠隔の） - vision（視る）



石田英敬『大人のためのメディア論講義』（ちくま新書、2016年）
p64 図2-7 遠隔テクノロジー

「メディアと記号についての三つのテーゼ」

第一テーゼ

記号はテクノロジーの文字によって書かれている！

第二テーゼ

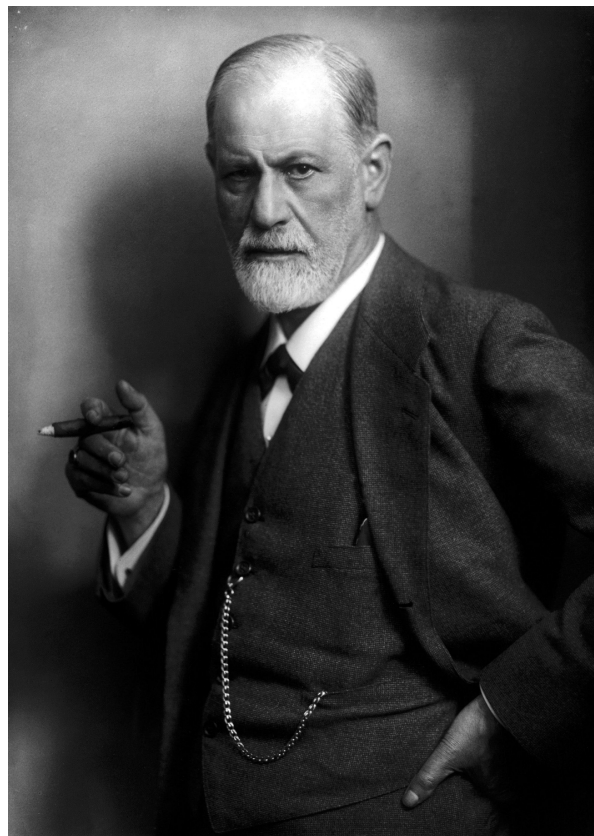
記号は意味と意識を生み出す！

第三テーゼ

私たちは、テクノロジーの文字を読むことができない！

伴立命題

メディアとは、テクノロジーの文字の問題だ！

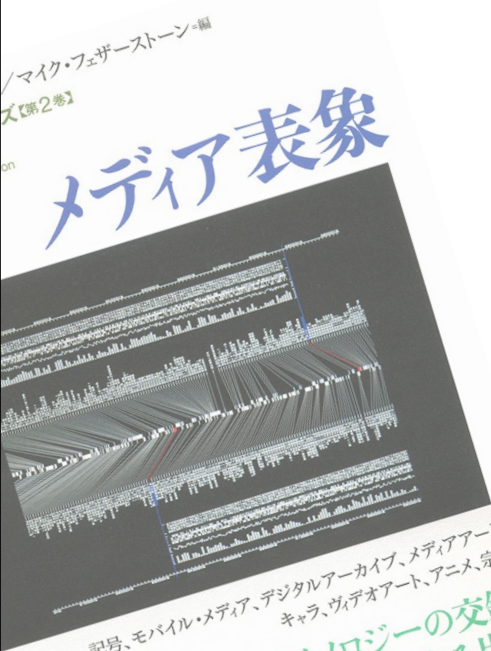


from Wikipedia Commons

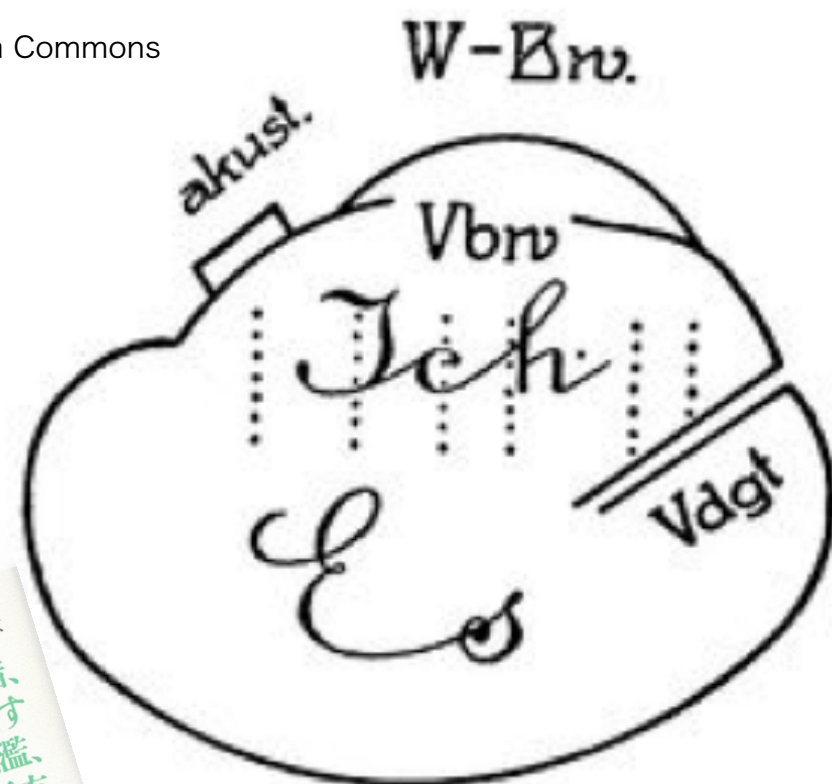
文字と心とはどんな関係？

フロイトの「心の装置」論

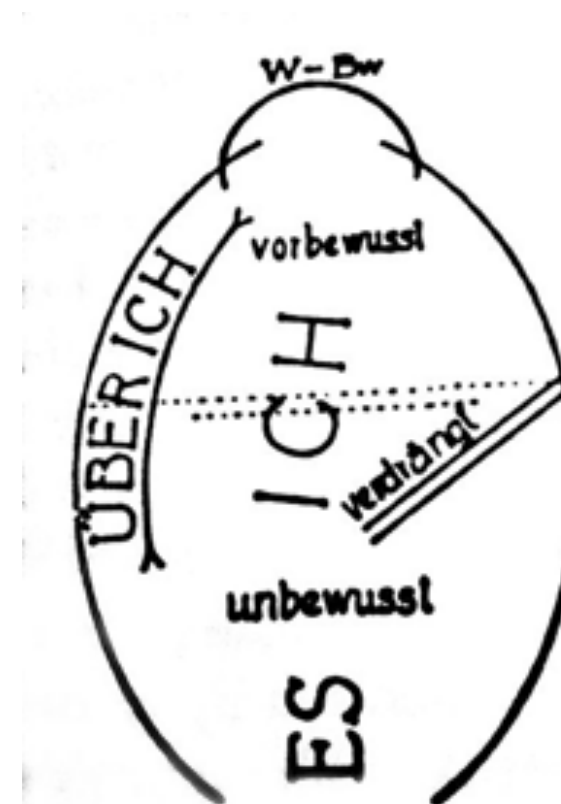
フロイトが考えた〈心の書き込みシステム〉、
それこそ〈精神分析〉の中心理論！



記号、モバイル・メディア、デジタルアーカイブ、メディアアート、
キャラ、ビデオアート、アニメ、宗教
記号・文字・言語とテクノロジーの交錯、
テクノロジーが生み出す
テクノロジー・アニメの氾濫、
表象文化の行方
石田英敬編、吉見俊哉編、マイク・フェザーストン編
『メディア表象』（東京大学出版会、2015年）
<http://www.utp.or.jp/book/b307081.html>



from Wikipedia Commons



from Wikipedia Commons

フロイトの問い：

心は〈メディアの形/脳の形〉をしているか？

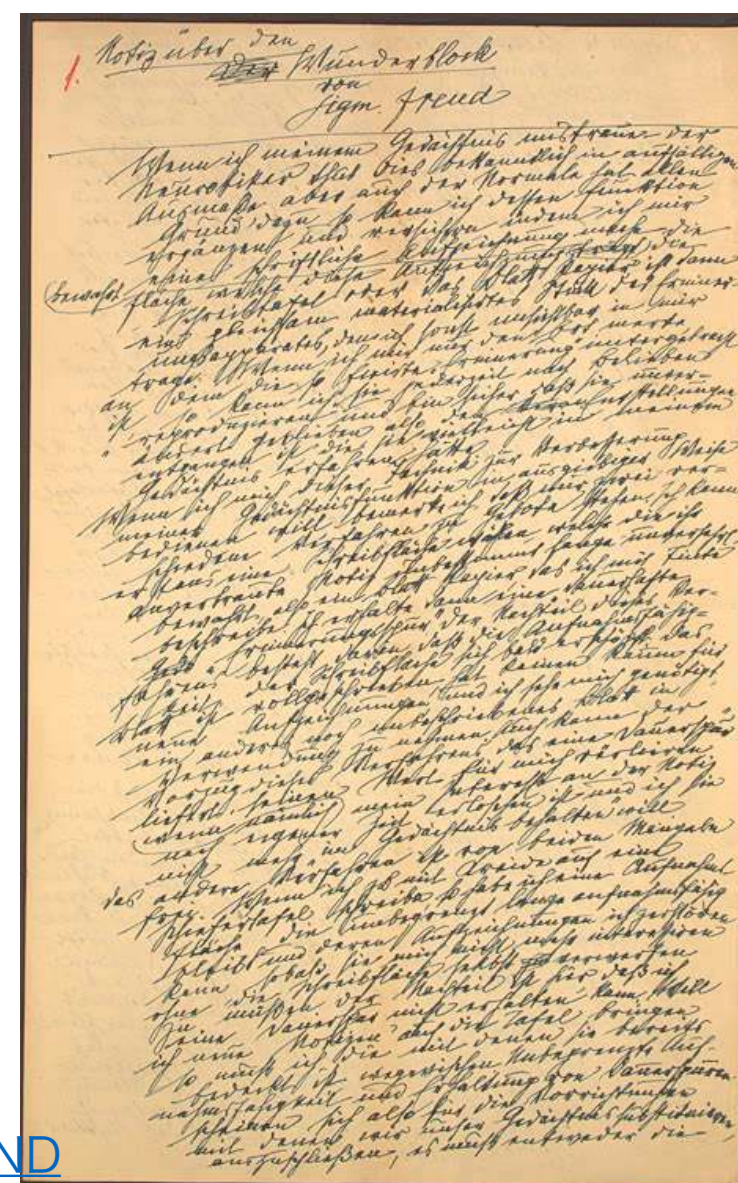
入口になるテキスト

1

「『不思議のメモ帳』についての覚え書き」

本間直樹責任編集『フロイト全集18 1922-24年 自我とエス みずからを語る』岩波書店2007年刊 所収

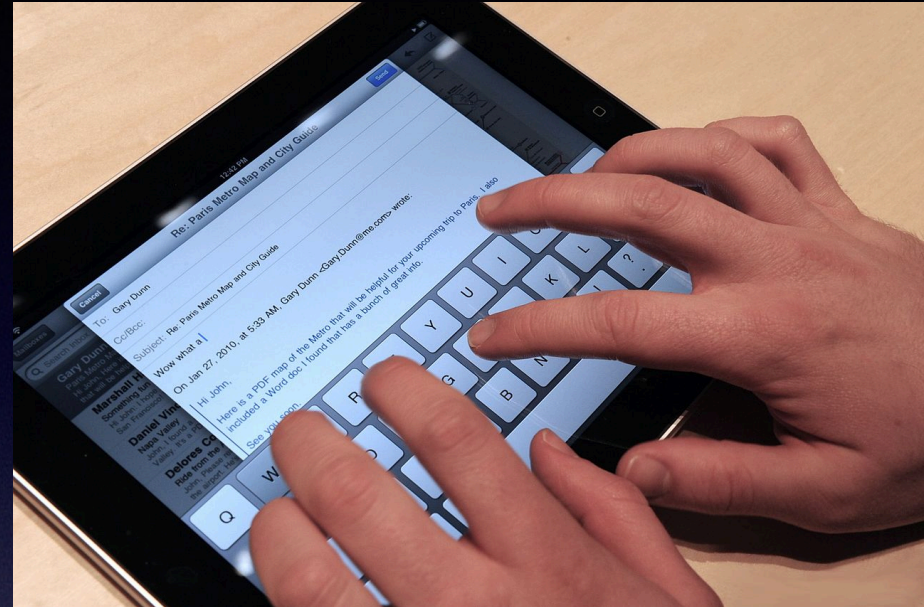
Sigmund Freud
Notiz über den Wunderblock, 1925
“Note on the ‘magic block’ “ 1925



『不思議メモ帳』①

フロイトに「『不思議メモ帳』についての覚え書き」（« Notiz über den ‘Wunderblock’ », 一九二五年）という有名な小論がある。不思議メモ帳(Wunderblock)とは、「マジックスレート」や「お絵描き板」といった名前で日本でも昔から売られている子供向け玩具である。蝋板とパラフィン紙と透明なセルロイド板(最近のものは素材をプラスチックなどに変えているが)を重ねて、セルロイド板の上からペン代わりの尖筆で文字や絵を書き込む。書き込まれたパラフィン紙を持ち上げて蝋板から離すと、記入面が新(さら)になって何度でも書いたり消したりできる。

**Freud « Note on the 'magic block' » (1925)
(« Notiz über der 'Wunderblock' » 1925)**



by matt buchanan ,from Wikipedia Commons

https://ja.wikipedia.org/wiki/IPad#/media/File:Apple_iPad_Event03.jpg

CC BY 2.0

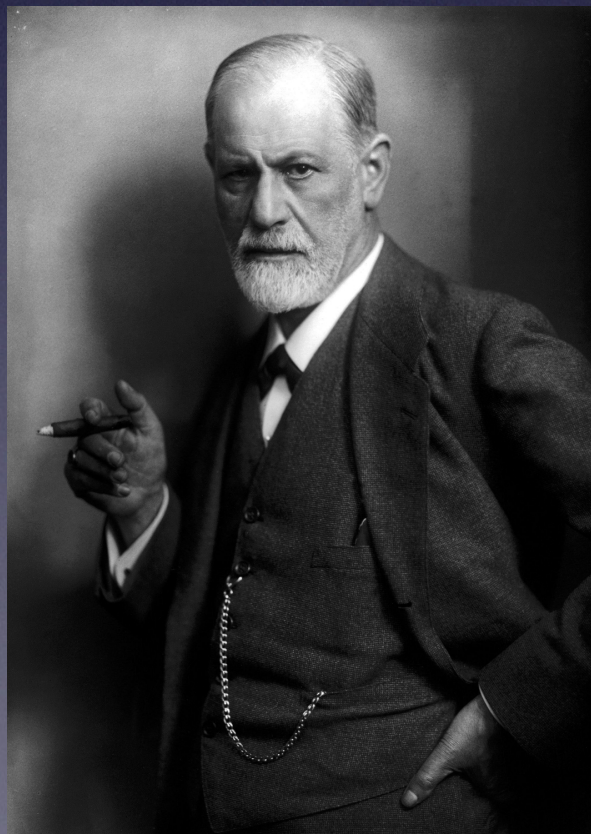


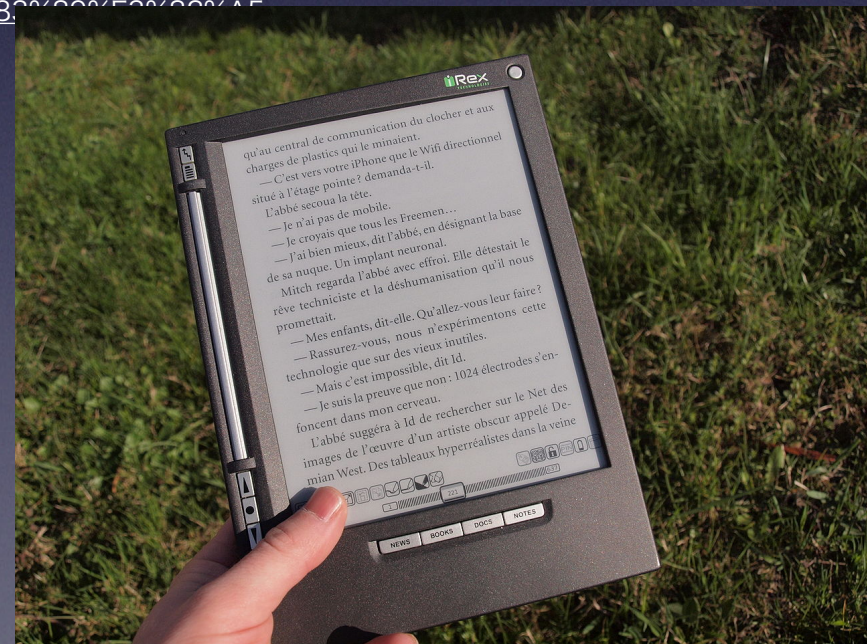
Photo by Regregex,from Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

[illegible]

%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%AB

CC BY-SA 3.0

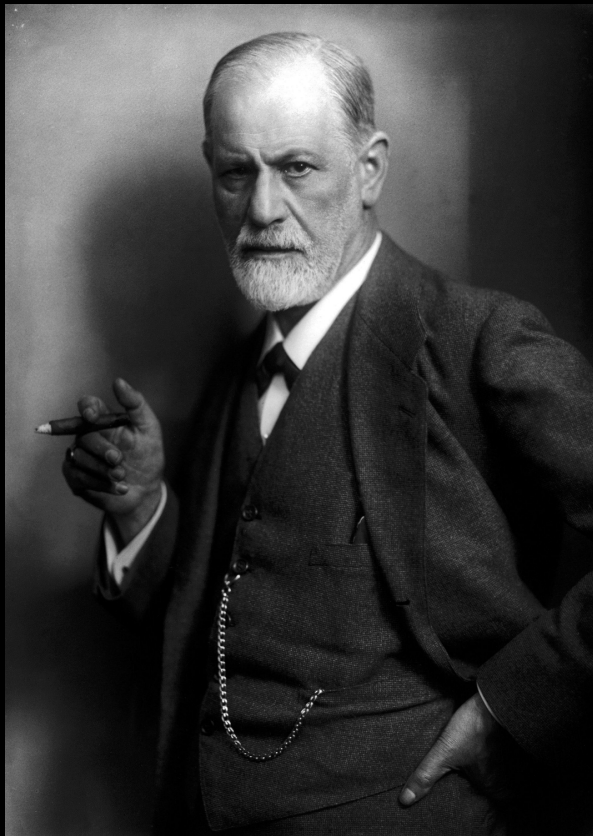


from Wikipedia Commons

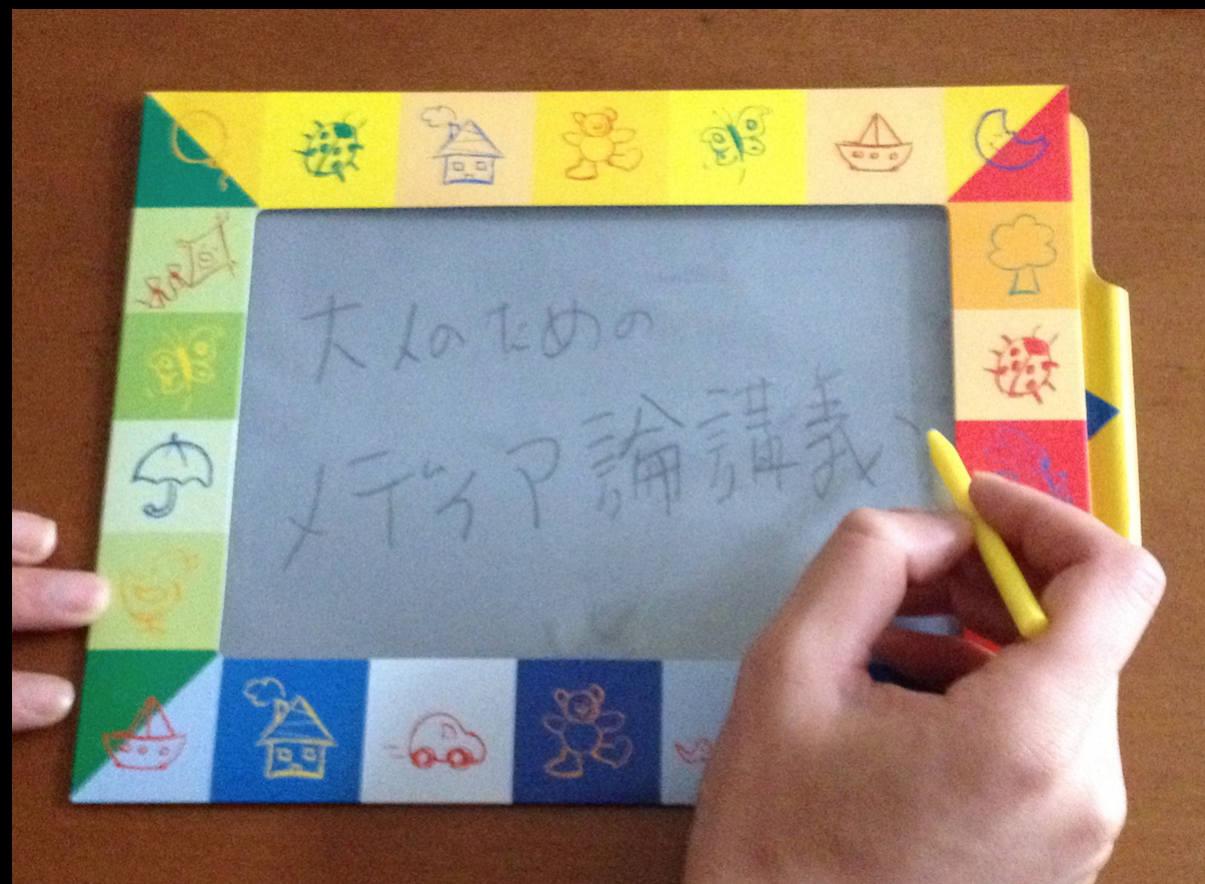
from Wikipedia Commons

文字と心とはどんな関係？

文字と〈心の装置〉



from Wikipedia Commons



著作権等の都合により、
ここに挿入されていた画像を削除しました

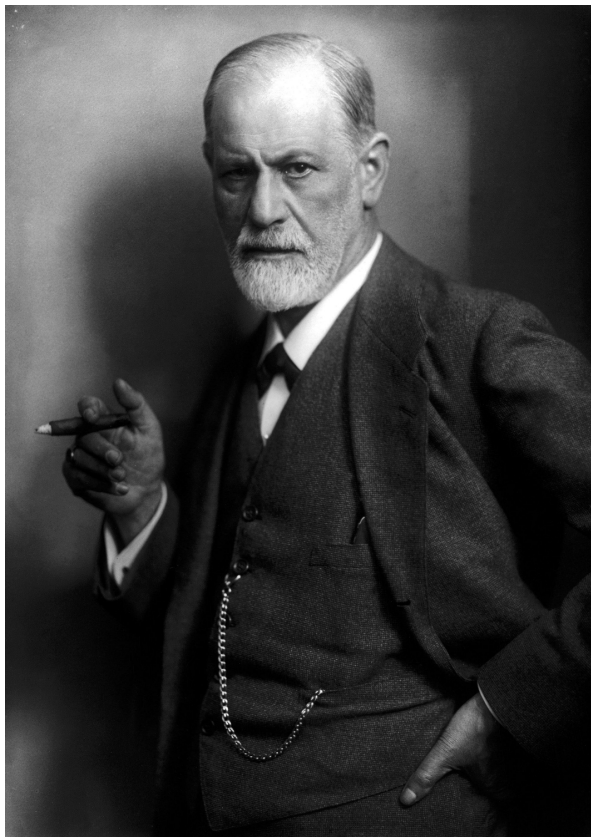
オックスフォード大学所蔵
プラトンとソクラテスの絵画

石田英敬『大人のためのメディア論講義』（ちくま新書、2016年）

p17

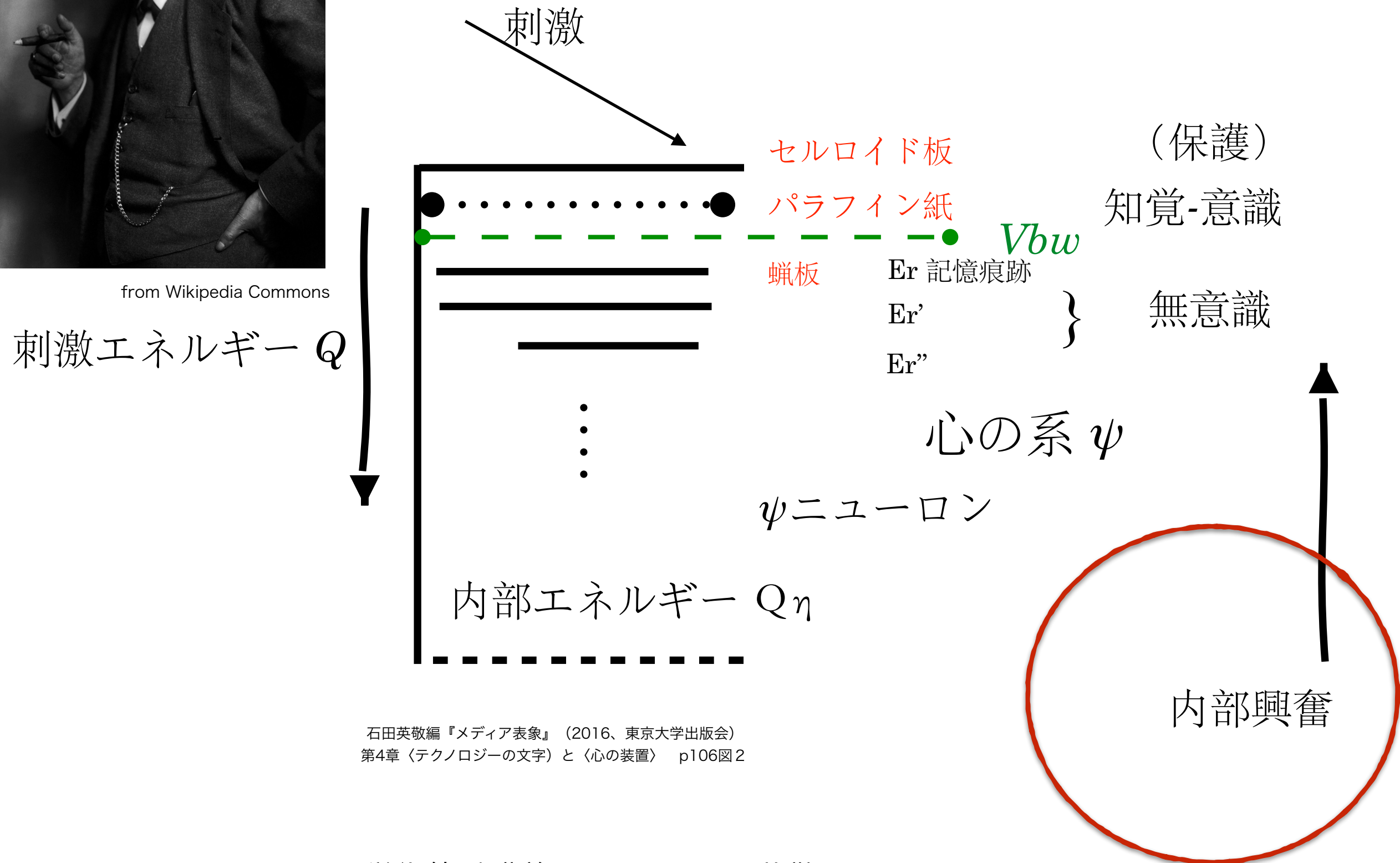
『不思議メモ帳』②

「快感原則の彼岸」(1920)や「自我とエス」(1923)を書いていた当時のフロイトは、これを「**心の装置**」の格好のモデルとして取り上げている。**透明なセルロイド板**は、尖筆で書き込む入力 of 圧力を受けとめて、**外部刺激からの「保護」**の役割を果たしている。その下の**薄いパラフィン紙**は、入力が文字や絵として表象化される「**知覚-意識**」の層。それよりも下にある**蝋板**は、痕跡が「**記憶**」として貯蔵される「**無意識**」の層にたとえられる。



from Wikipedia Commons

「不思議メモ帳」の構造



石田英敬編『メディア表象』（2016、東京大学出版会）
第4章〈テクノロジーの文字〉と〈心の装置〉 p106図2

『不思議メモ帳』③

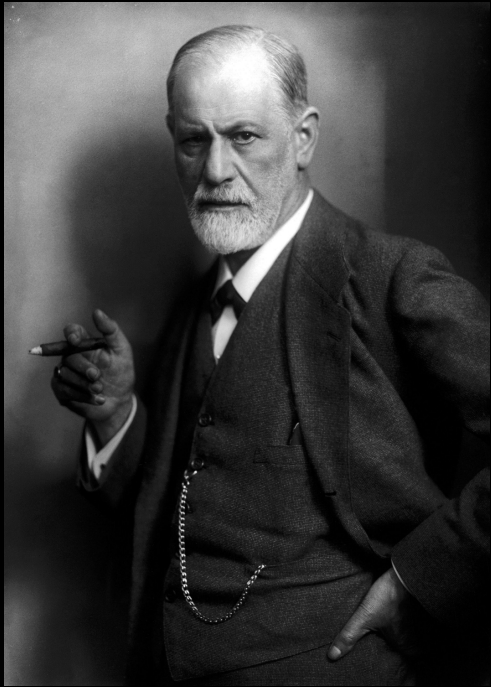
「不思議のメモ帳は、一度消去されてしまった文字をその内部から「再生する」などということもできない。万が一、われわれの記憶と同じ再生能力を有するのなら、**それこそ真に不思議のメモ帳**と呼ぶに値しよう。」

(フロイト)

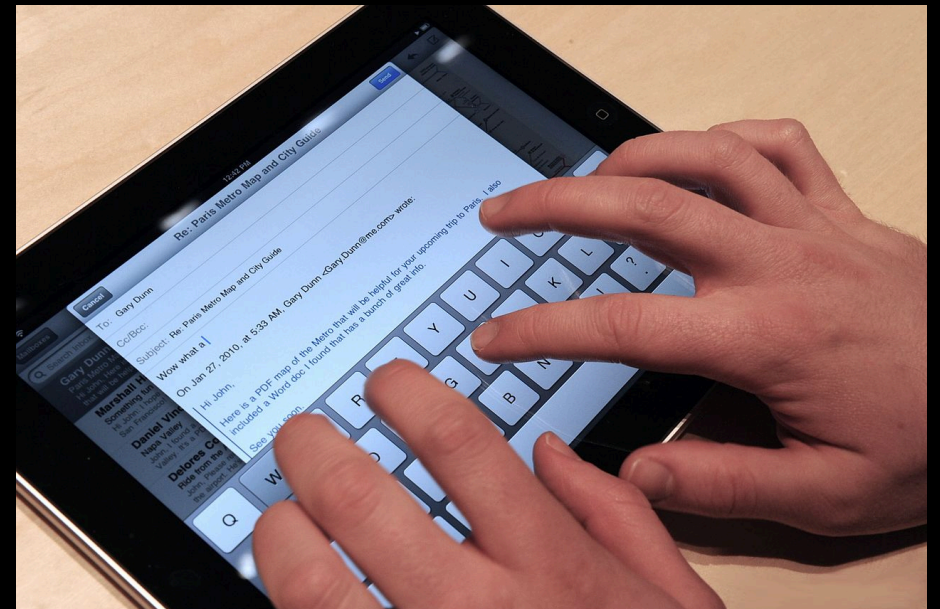
フロイトの説を延長するなら、現代人は、i-Padのような「**心の装置**」の**補助具**を携えて、メディアに結びつき生活していることになる。外部世界からの刺激情報をメディア端末を通して受け取り、意識にとどめて表象を生みだしては、記憶の層へ次々に送り込んでいる。「不思議メモ帳」

(Wunderblock) の英語名が**magic pad**であることを思えばこの一致は、さらに意味深く思えてくる。私たちの「知覚-意識」に現れる現象は、私たちの心の装置の蠟板へと送り込まれると同時に、コンピュータやサーバーのメモリーに送り込まれて蓄積され、それぞれの**記憶の層**から呼び出されたり消去されたりしつづけている。

テクノロジーの文字と〈心の装置〉



from Wikipedia Commons



by matt buchanan ,from Wikipedia Commons
https://ja.wikipedia.org/wiki/IPad#/media/File:Apple_iPad_Event03.jpg
CC BY 2.0



Photo by Matt Yohe,from Wikipedia Commons
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%96%E3%83%BB%E3%82%B8%E3%83%A7%E3%83%96%E3%82%BA#/media/File:Steve_Jobs_Headshot_2010-CROP.jpg
CC BY-SA 3.0

2

フロイトの「心の装置」は
いかに組み立てられたか？

(1) 出発点には、最初期の著作『失語症の理解に向けて -- 批判的考察』(一八九一) で、ヴェルニケやリヒトハイムが呈示した「言語装置 (Sprachapparat)」の学説を批判する作業を通して、言語中枢の解剖学的な局在説を否定して、「連合」にもとづいた機能説に依拠して独自の「言語装置」理解を呈示する企てがあった。

(2) さらに、『心理学草稿』(一八九五)におけるニューロン組織を単位とした「 $\phi\psi\omega$ 装置」の構想があった。

(3) あるいは、一八九六年十二月六日のW・フリースへの書簡で示された、「知覚W. I 知覚指標 W.Z. II 無意識 UBw III 前意識 VBw 意識 Bw」という記憶の「記号 (指標)」論があった。

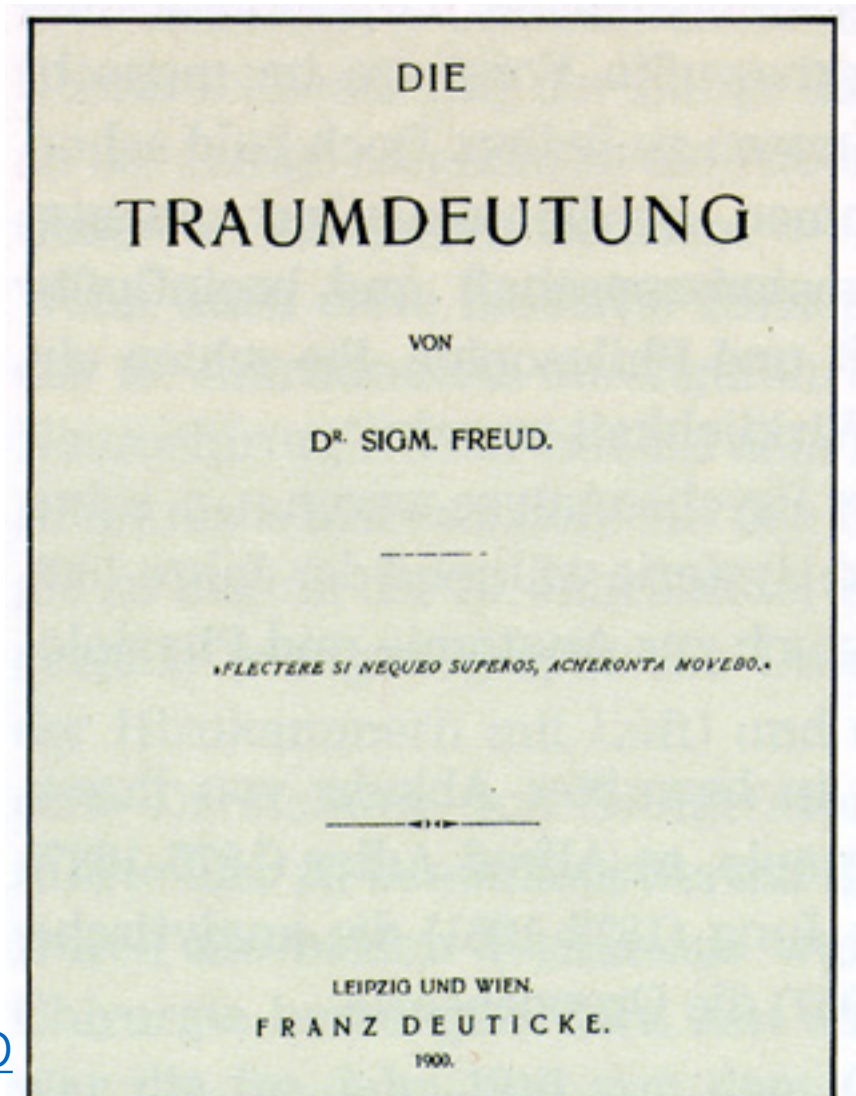
3

『夢解釈』

(1899、刊行日付1900)

The Interpretation of Dreams
(Die Traumdeutung 1900)

from Wikipedia Commons

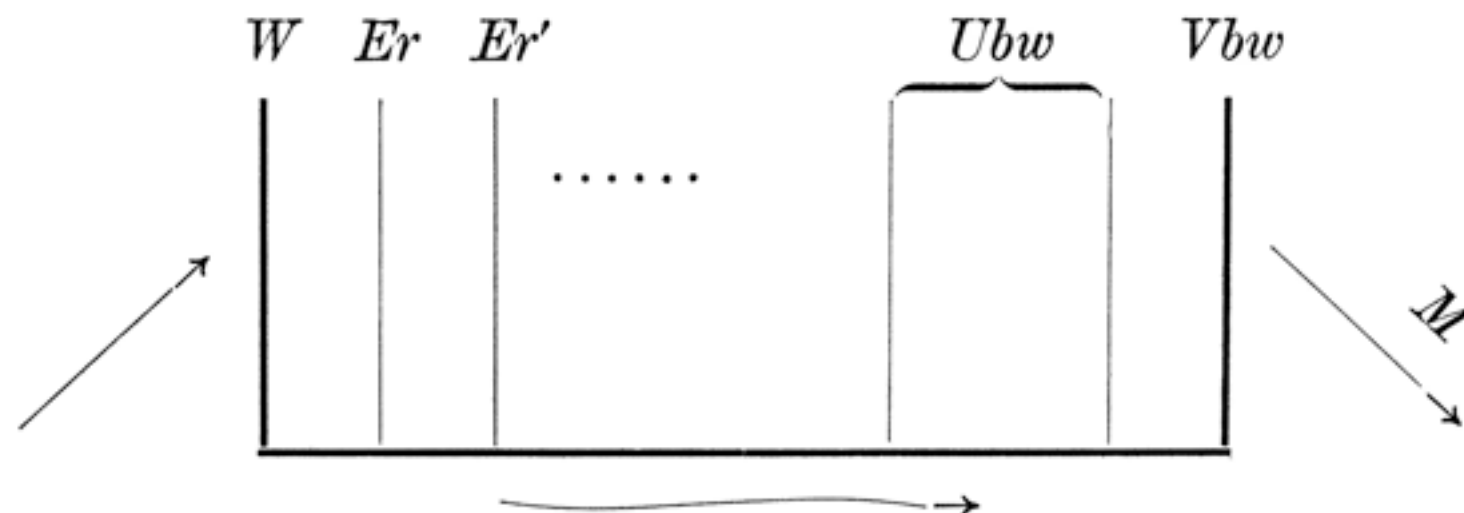
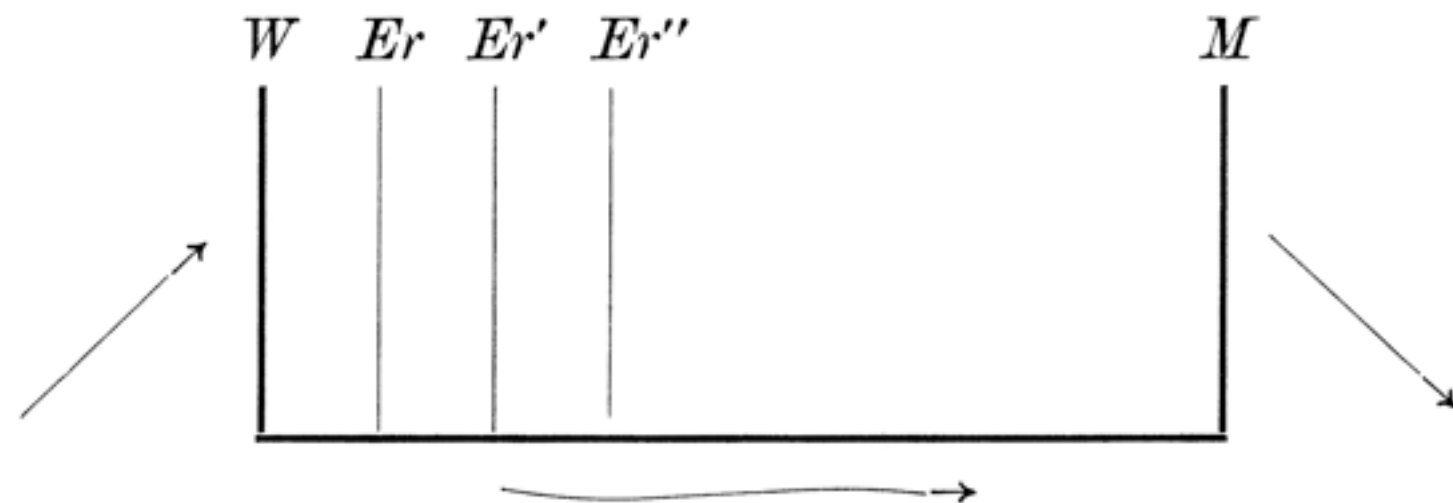
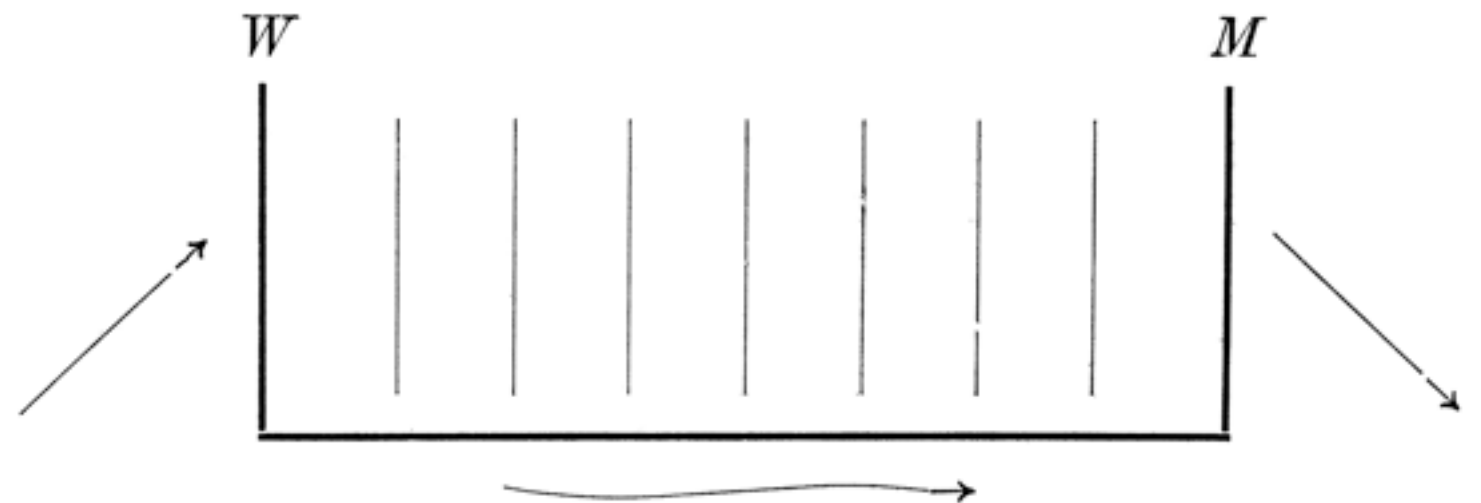


「心の装置 seelische Apparat」

「われわれは、心の作業に仕えている道具立てを、たとえば組み立てられた顕微鏡、あるいは写真機、などのように思い描いてみるのである。そうすると、心的局在性といったものは、ある装置の内部のある場所に対応し、その場所において、像のいくつかの前段階のうちの一つが結ばれるということになる。顕微鏡や望遠鏡の場合には、これらは周知のように、ある程度は観念的な場所性とか閾とかなのであって、そういうところに、装置の実質的成分が存在しているわけではない。」

フロイトの第一次局所論

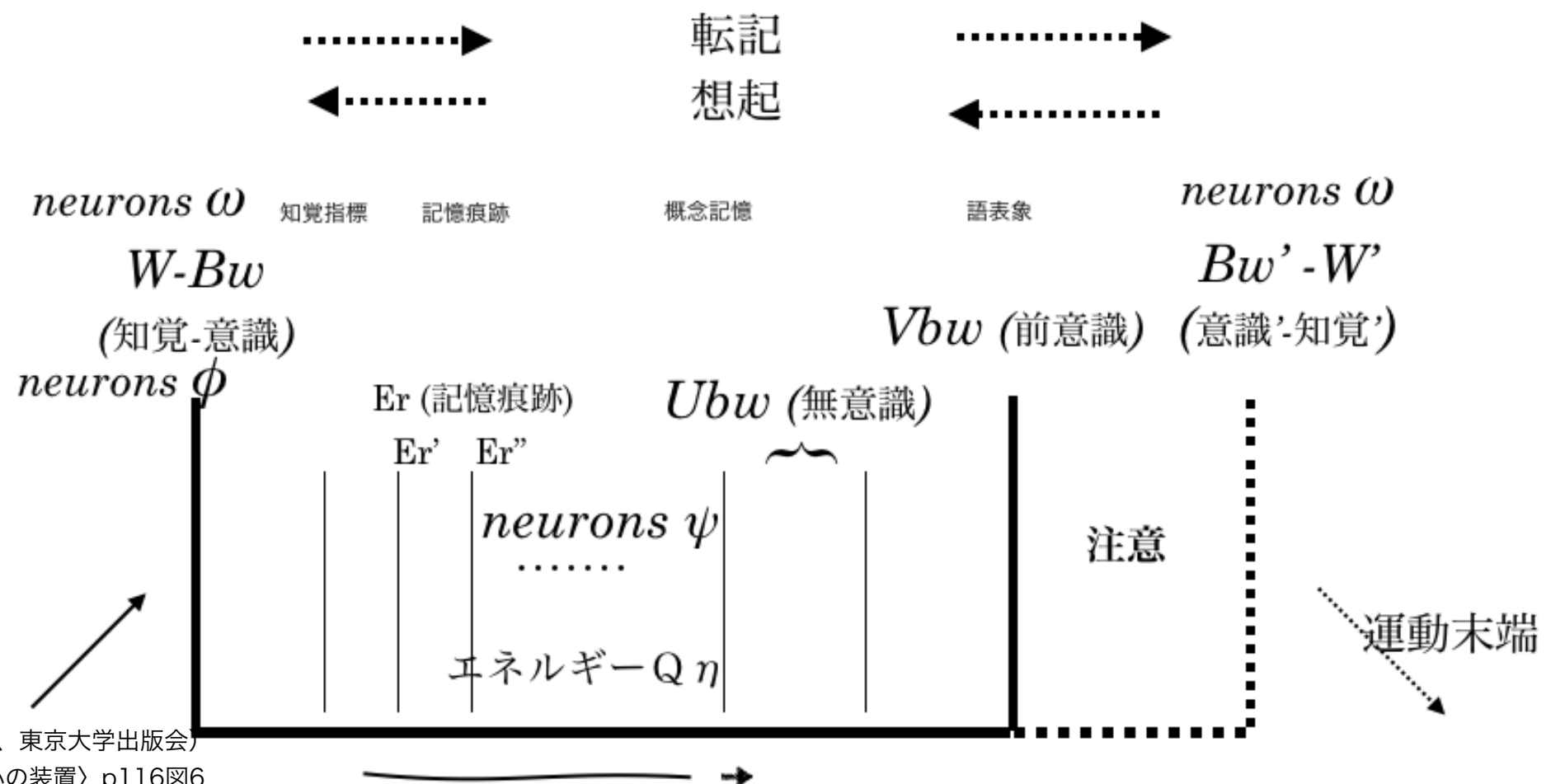
DIE TRAUMDEUTUNG 1900



石田英敬編『メディア表象』（2016、東京大学出版会）
第4章〈テクノロジーの文字〉と〈心の装置〉
p110図3、p113図4

第一次局所論

感覚器官（「知覚-意識W-Bw」系）から入力された刺激は、経験の痕跡（記号）を「記憶痕跡系(Er、 Er',,,)」として残して「転記」を受け「前意識 Vbw（言語）」にいたる。「前意識」は注意力を備給されて意識化されると「知覚-意識W-Bw」へと「想起」のリサイクルを行う。これが経験を「想起」することである。「前意識（言語）」は、「意識Bw」への通路を監視していて、検閲された記憶痕跡は「無意識Ubw」の系として残される。



シネマトグラフィックなプロセス

フロイトは、**記憶痕跡系**を「望遠鏡の異なったレンズの系が、互いに重なり合っているような具合」に喩えていた。**隠喩的には光学装置であり、メタ心理学的には心の装置、また、言外には神経学的装置**としても密かに定式化されていると読める。この第一次局所論の装置は、無意識の過程を通して、カメラのレンズの重なりが、次々とショットを撮るように、入力された刺激を**物表象**（指標記号）として記録していく。そして、最後に、それらの知覚と記憶の**物表象のプロセス**が**前意識系**に辿り着き、**物表象が語表象**（言語記号）**と結びつけられるという仕組み**になっている。この一連のプロセスは、フロイトによって、**シネマトグラフィックなプロセスとして定式化**されている。加えて、「フリースへの手紙」が述べていたように、記憶痕跡を形づくるのは、「知覚指標」に始まる、幾層もの指標記号であり、それらの痕跡を結びつけている連合〔連想〕関係は、「同時性」の関係に始まって、「因果的な」もの、「概念的な」もの、等々と－レンズの重なりのように－層を重ねていると考えられていた。

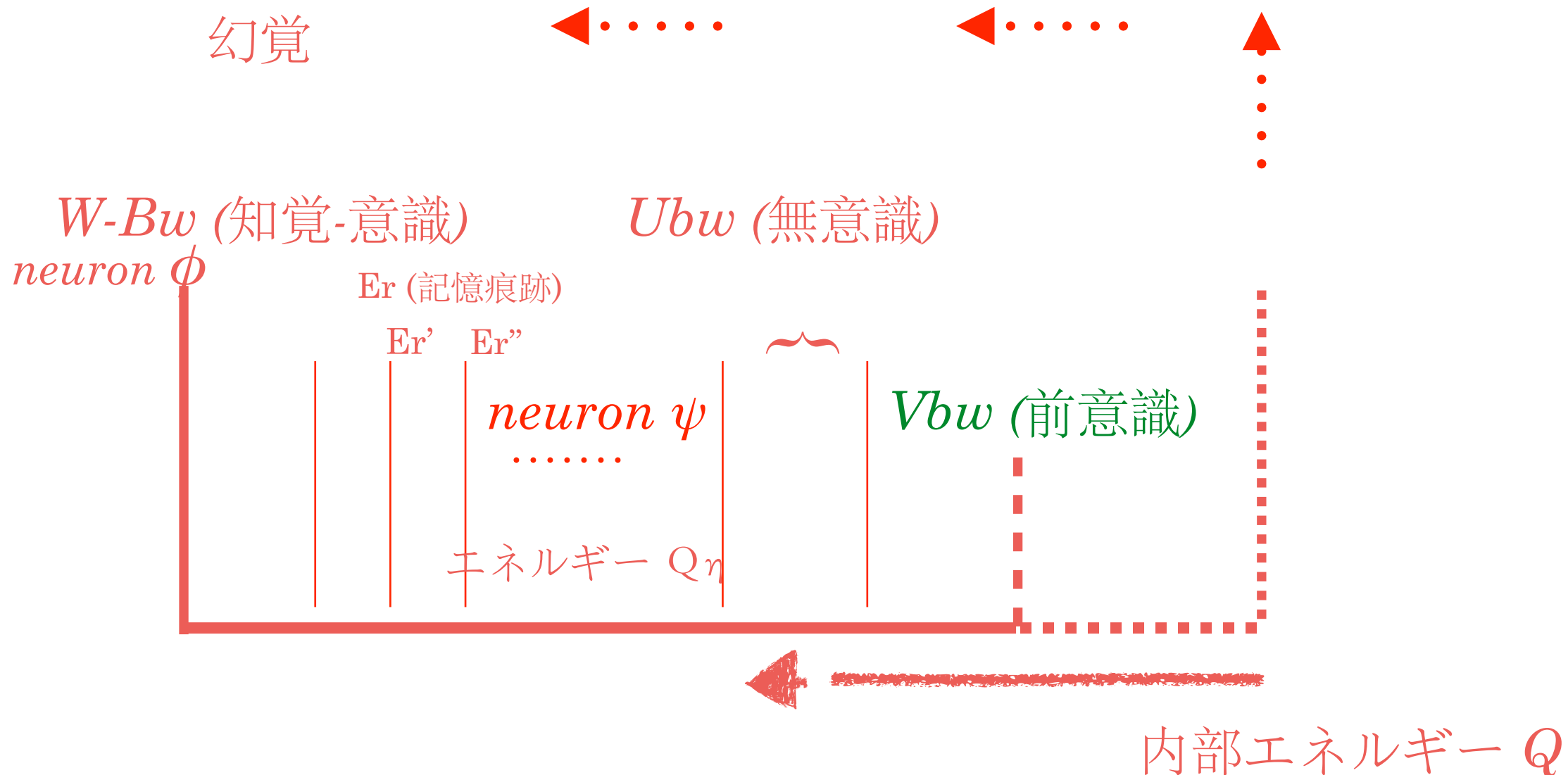
眠りと「夢の過程」

睡眠においては、運動性と切り離され、装置の働きが逆転して、「心の装置」は「退行」を始める。それをフロイトは「夢の過程」と呼ぶ。心の装置は、夢のスクリーンのうえに「像」の幻覚的な投影を始める。

幻覚的な夢において発生している出来事は、次のような言い方をすることによってしか記述できない。すなわち、興奮が後ろ向きの道を取る、ということである。興奮は、装置の運動末端へと伝播する代わりに、感覚末端へと伝播して行き、とうとう知覚の系にまで達する。覚醒時において、心的過程が無意識から進行する際の方向性を前進的と呼ぶならば、われわれは夢について、退行的性格を持つと言ってよいであろう。

リュミエール兄弟の発明したカメラが撮影と投影とをともに行ったのと同じように、フロイトの心的装置もまた、感覚末端から入力された興奮が記憶痕跡系、無意識、前意識、意識、運動末端へと伝播する覚醒のプロセスに対して、睡眠においては、興奮は感覚末端へと向けて、退行してゆき、幻覚的な夢の像の投影が引き起こされるのである。

「夢の過程」：〈退行〉と〈幻覚〉



「昼の間は、 W の ψ 系から運動性の方に向かって、持続的に動いている流れがある。この流れは、夜になると終息して、興奮の逆流に対しても、何ら阻止する術を識らない。」

『夢解釈』第七章、前掲書、三三四頁

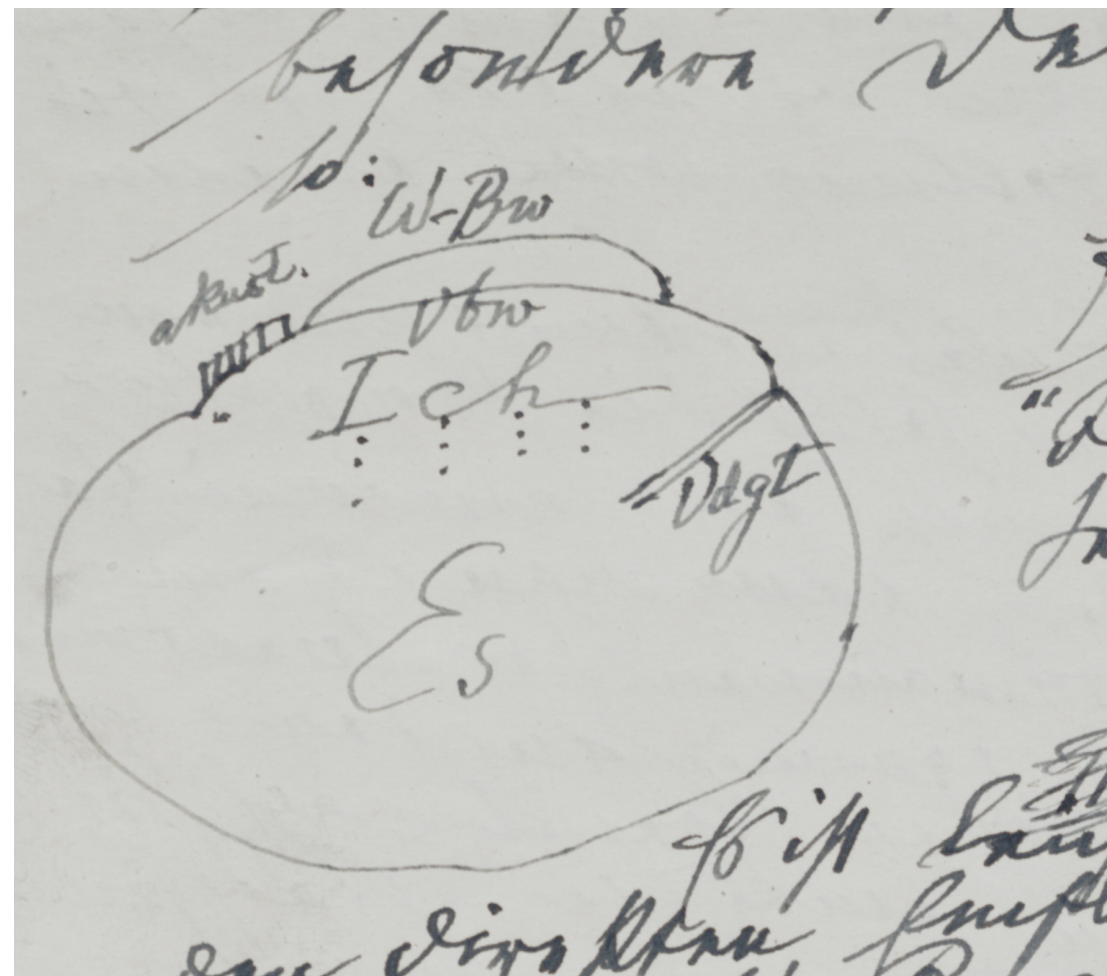
3

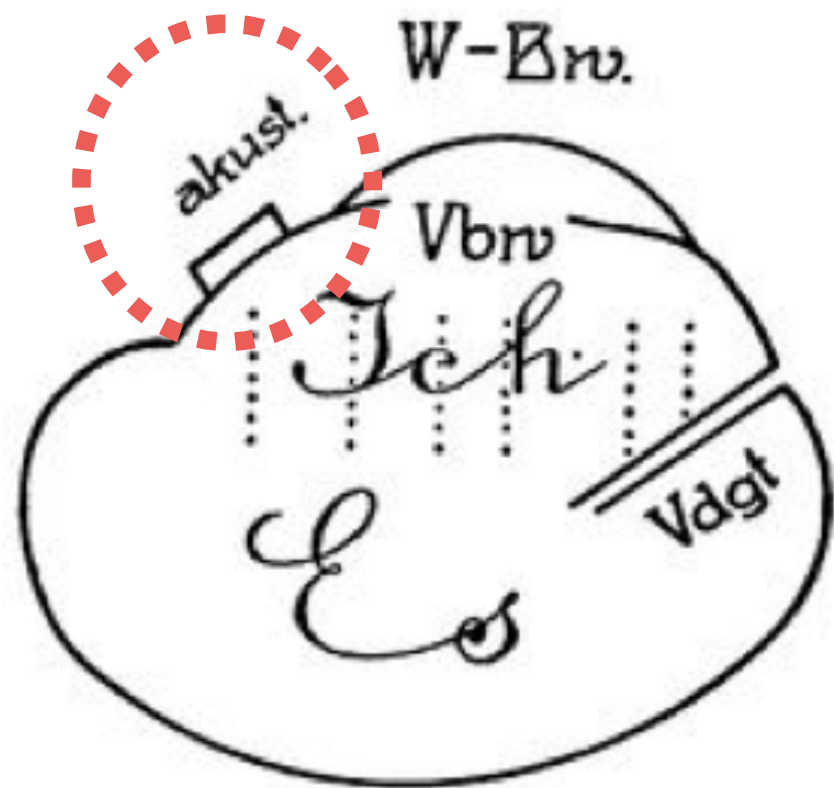
フロイトの第二次局所論

〈**脳**〉と〈**心の装置**〉

The Ego and the Id

(Das Ich und das Es 1923)

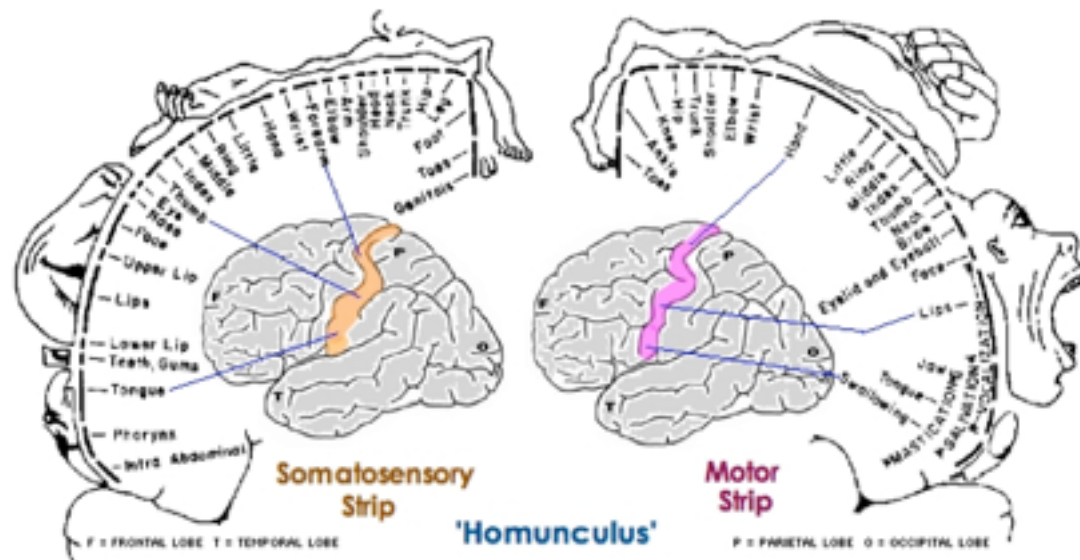




from Wikipedia Commons

フロイトが図解している心の装置（左図）においても、「知覚-意識 (W-Bw)」機能が外界との境界に維持され、想起痕跡 (....) は自我のψ系のうちに名づけられることなく書き込まれ、「抑圧内容(Vdgt)」が図示されているが「無意識(UBw)」は名づけられていない。「エス Es」が内的興奮の審級として、グロデックの著作から命名を借りて初めて記入されているが、内部的な心的な力の審級は、じっさいには、すでに『心理学草案』以来概念化されていたものである。

フロイトの記述からは、この図が、人間の脳の**大脳皮質の輪郭**を単純化したものであると理解できる。「自我 Ich」は大脳皮質的な表面に広がっているであり、より内部的なエスの上に浮かんでいる。



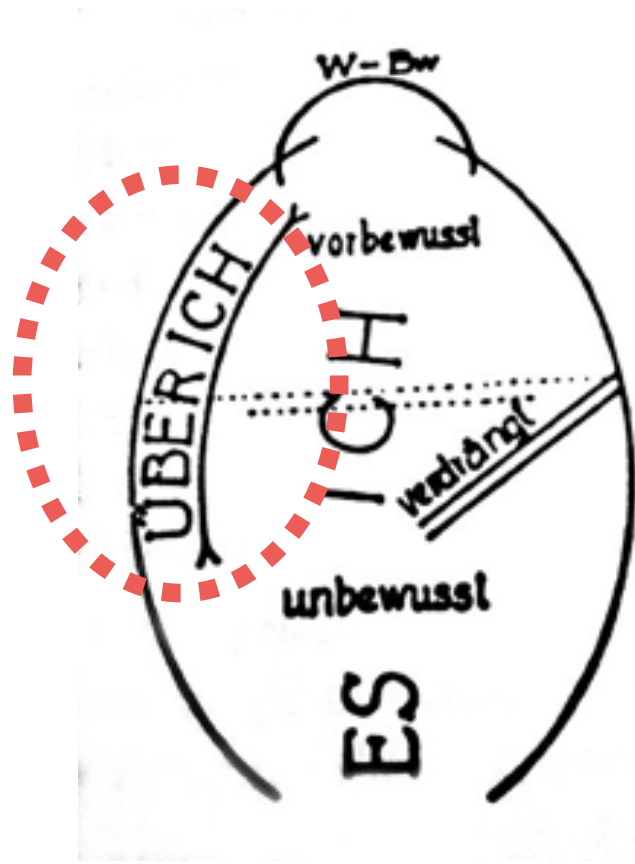
from Wikipedia Commons

著作権等の都合により
ここに挿入されていた画像を
削除しました

脳内人の画像

「自我とはとりわけ、身体的自我（身体を通して自らを意識する自我）なのであって、たんに表面に位置するものであるだけでなく、それ自体が表面の投射ともなっている。ちょうどこれにあたる解剖学上の類似物を探してみると、すぐに思い当たるぴったりのものは、解剖学者たちのいう「**脳中人**」である。**それは、脳皮質のなかで逆立ちをして踵を上方に伸ばし後方を見ている小人で、よく知られているように左側に言語野をもっている。**」

帽子はどこへいったか？



from Wikipedia Commons

言及されているのは、現在ではペンフィールドの図でよく知られている「脳内の小人（ホモンクスルス）」である。

フロイトにおいてはすでに、知覚から始まり、記憶と言語の機能を通して運動へといたる感覚機能が、「身体的自我」（知覚心理学と現象学のいう「己の身体」）の投影の場所としての大腦皮質の表面にモデル化されていたことが分かるのである。

「自我とエス」中の図には、本文中で理論化される「超自我」の審級が図示されていない。**ところが、エス・自我・超自我の三審級からなる第二局所論を解説した『続・精神分析入門講義』（一九三三年）で示される同じ図式のヴァリエーションには、「超自我」が図示されると同時に、逆に、「聴覚帽」が消されている。**

「超自我」とは「聴覚帽」の内在化

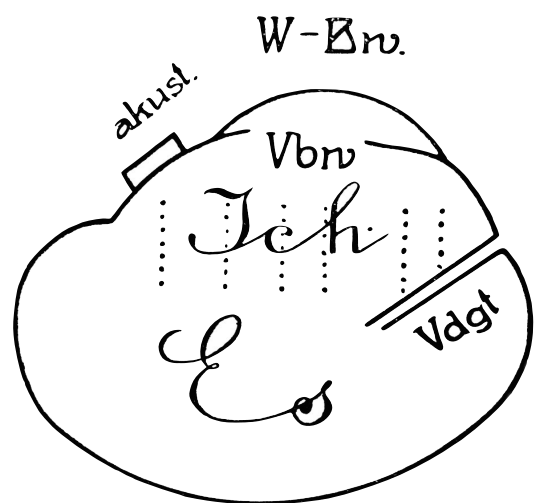
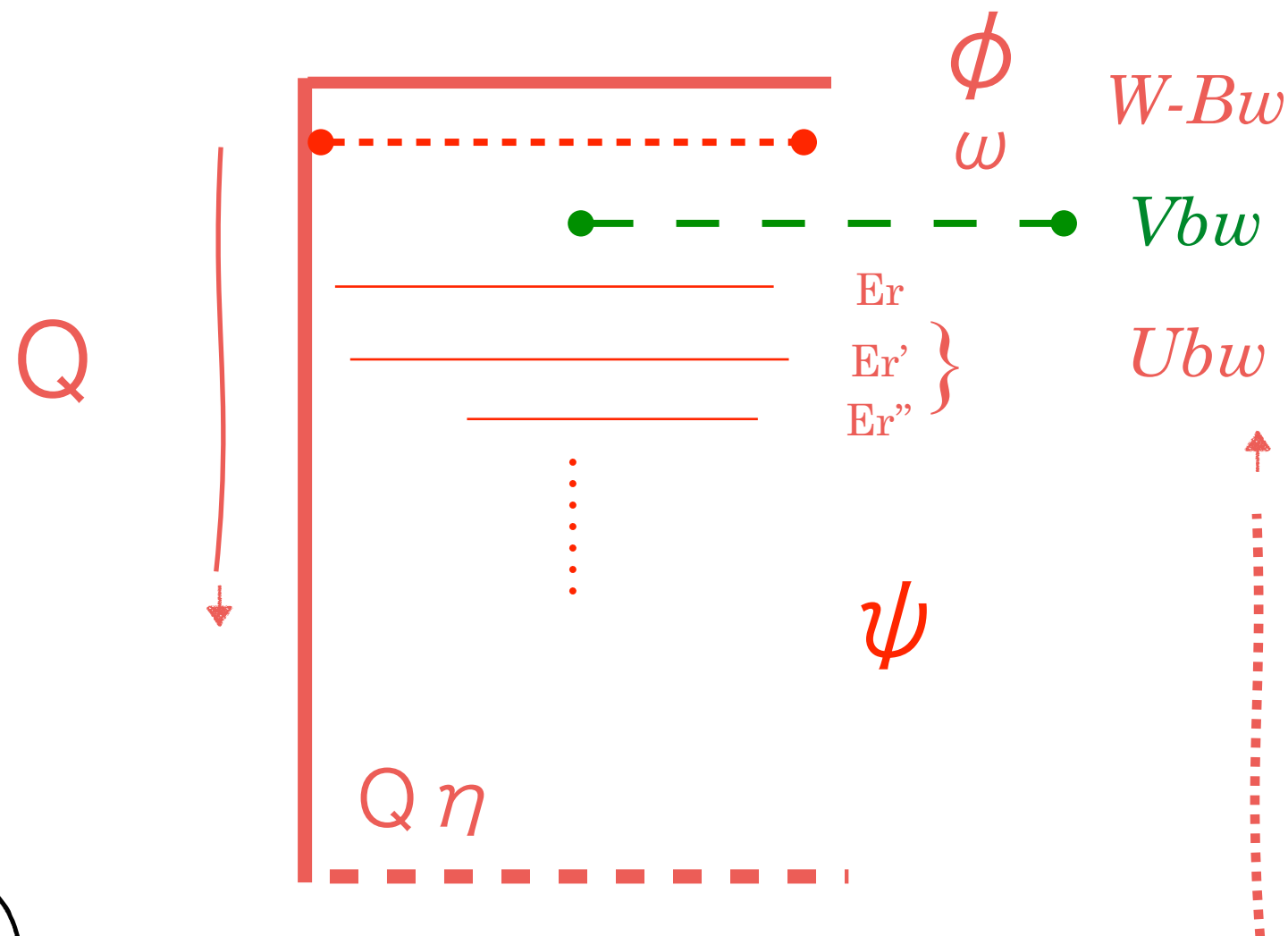
フロイトは超自我をエディプスコンプレクスから説き起こして、エスから無意識的に備給を受けるとしているが、その自我理想の発生と「自我のなかの前意識的な諸残渣」との関係を吟味している。

「超自我は、意識的な自我には左右されず、無意識的なエスと密接につながっている。さてここで、自我のなかの前意識的な諸残渣に与えておいた意義を考慮に入れるなら、次のような問いが頭をもたげてくる。すなわち、超自我は、無意識的だとするなら、そうした**語表象から成り立っているのではないか**。そうでないなら、いったい何から成り立っているのか、という問いである。控え目ながら、これに対する答えはこうなるしかなかろう。つまり、**超自我もまた、耳で聞かれたものから発したという自らの出自を否認できるわけではなく、じっさいそれは、自我の一部として、こうした語表象（概念、抽象概念）から生まれて意識に食い込んでいる**のであるが、ただし、超自我の内容に備給エネルギーを供給しているのは、聴覚知覚や教育や読書ではなくて、エスの内部の源泉なのである、と。」

ソシユールの言語記号学が、電話による「**ことばの回路**」を通して言語記号を定式化したとすれば、同時代のフロイトは、その「ことばの回路」が、「**心の装置**」を通して、いかに「身体的自我」と「記憶」、そして「文化」の無意識的深層の回路にまで結びついて
いるかを理論化していると考えられることもできる。

『不思議メモ帳』とフロイトの二つの「局所論」

W u n d e r b l o c k



from Wikipedia Commons

『不思議メモ帳』③

「不思議のメモ帳は、一度消去されてしまった文字をその内部から「再生する」などということもできない。万が一、われわれの記憶と同じ再生能力を有するのなら、**それこそ真に不思議のメモ帳**と呼ぶに値しよう。」

(フロイト)

フロイトの説を延長するなら、現代人は、i-Padのような**心の装置の補助具**を携えて、メディアに結びつき生活していることになる。外部世界からの刺激情報をメディア端末を通して受け取り、意識にとどめて表象を生みだしては、記憶の層へ次々に送り込んでいる。

私たちの「知覚-意識」に現れる現象は、**私たちの心の装置**の蠟板へと送り込まれると同時に、コンピュータやサーバーのメモリーに送り込まれて蓄積され、それぞれの**記憶の層**から呼び出されたり消去されたりしつづけている。

IPadは、なぜ「真の不思議のメモ帳」か？

I コンピュータにおいては、二つの〈文字の解放〉 -- 理想化 -- が起こっている。ひとつは、文字の電子化。すなわち、文字を消したり点けたりすることができるようになった。一箇所に書いてもそれが消えて別のN個の箇所に瞬時に -- リアルタイムで -- 書き写すことができるようになった。二つ目は、文字が数字になった。こちらは計算論化で、つまりは、究極的にはすべてが0と1で書かれるようになった。このことの御利益は、すべての文字は他の全ての文字との関係づけのみによって定義されるようになった。デリダ先生が、「シンタクティクスのセマンティクスに対する還元不可能な過剰」と呼んでいた事態が理想状態で実現したわけだ。この二つの御利益で、文字は場所から自由になり、N次元の〈潜勢的な頁〉を持つようになった。

このうち、二つ目の原理の発明は、ハノーヴァー図書館司書ライプニッツ師が起源で、それがかれの「普遍記号法」。一つ目についていえば、その工学的な発明はフォン・ノイマン型マシンということだと思うね。

この問題は、フロイトも考えていたアポリアで、どうしたら、書いた文字を保存したまま、同時に新しい文字を同じ表面に書き込むことができるかを、かれは考え続けていた。かれの「不思議のメモ帳についてのメモ」がその代表的な論考だね。そして、それは、「心の装置」をいかにモデル化するか、という問題ともつながっていた。石田がそれについては書いているね。

石田英敬「新『人間知性新論』 〈本〉の記号論とは何か」

M あの石田の論文なら読んでいるよ。フロイトの「不思議のメモ帳」は、「IPad」の一手前にある「心の装置」のモデルだという論考でしょう。じっさい、「IPad」は、いまでは人間の心の補助具となってしまうているからね。僕のAnarchiveも「IPad」を通して見るわけだし。第二の「計算論化」が、フロイトにはないね。つまり、フロイトはアナログ・メディア革命に属している、というわけだね。

他方、ボルター博士の議論にしたがうと、コンピュータによる〈参照〉は、パースのいう記号過程であって、記号列の関係づけによる連続から成り立っていると。パースのいうように、心は記号の連続による推論だというわけだが、その推論はコンピュータにおいては〈計算〉である、ということになるね。

I そうなんだね。図書館に「リフェレンス（参考）係」ってあるでしょ。コンピュータの〈参照〉というのは、リフェレンス係の仕事と同じで、ああ、その本ならあそこの部屋のあの列のあそこの棚にあります、ということをやっているのだよね。本に書かれていることが分からないので、これはどんな意味なんだろうと訊きに行くと。そのテーマやその言葉ならこのような別の棚のこの辺りの本に出てきます、と、延々と答え続けてくれる、とても親切な司書みたいなものを想定するといいわけだよね。でも、ぼくが知りたい言葉の意味とか知識の中身とかは決して教えてくれない、そういう仕組みになっていると思えばよい。

それこそがコンピュータに媒介された〈普遍図書館化した世界〉の原理なのだけど、みんなそれを忘れていてのではないか。

石田英敬「新『人間知性新論』 〈本〉の記号論とは何か」

Information Management: A Proposal

Tina Berners-Lee, *CERN*

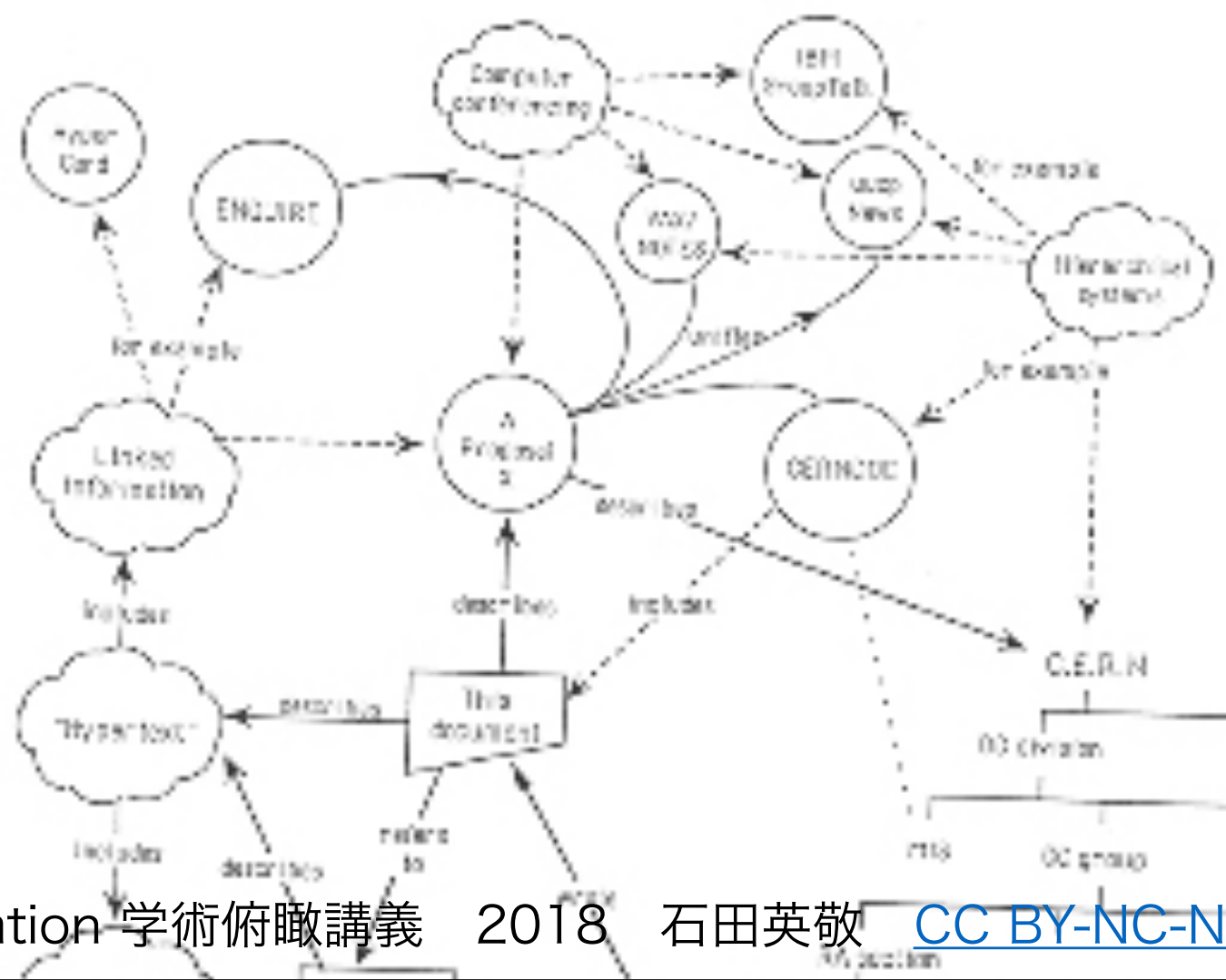
March 1985

III

Information Management: A Proposal

Also

Keywords: Hypertext, Computer conferencing, Document retrieval, Information management, Project research.



WWWの普遍図書館のなかで

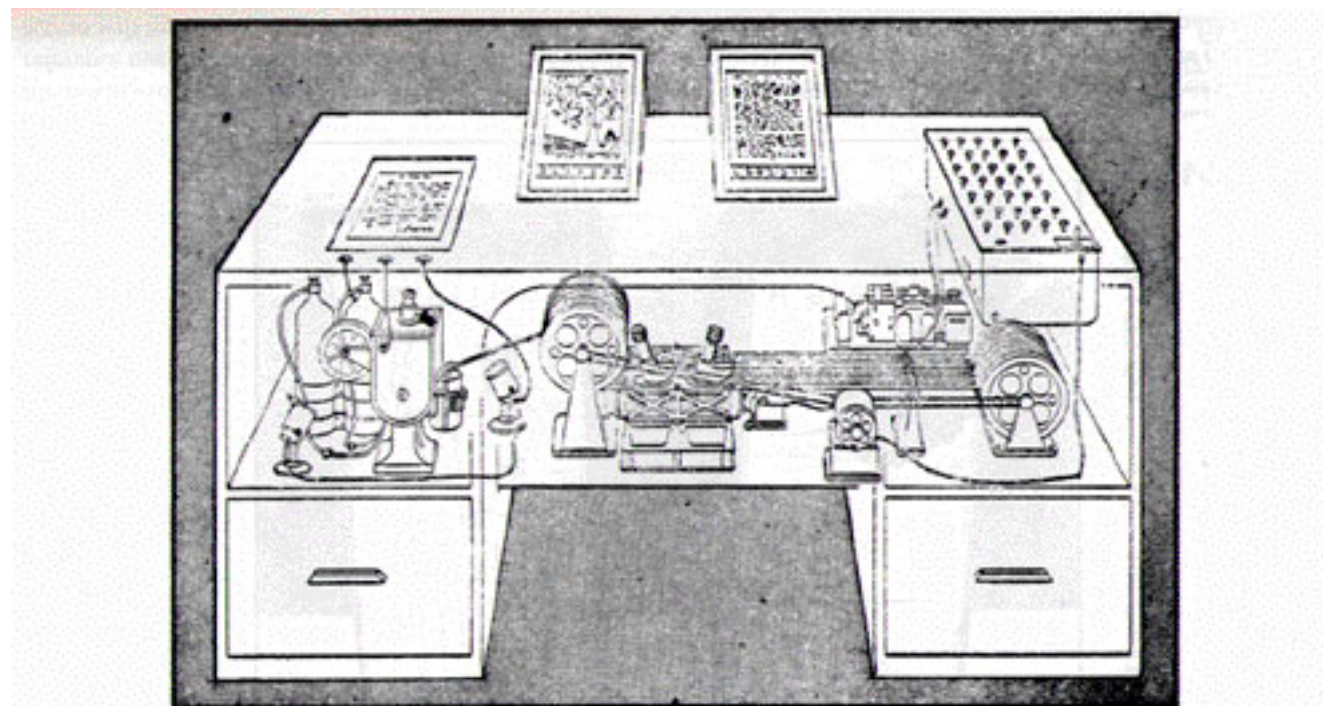
PROPOSAL by Tim Berners-Lee

©CERN

Hypertext Transfer Protocol

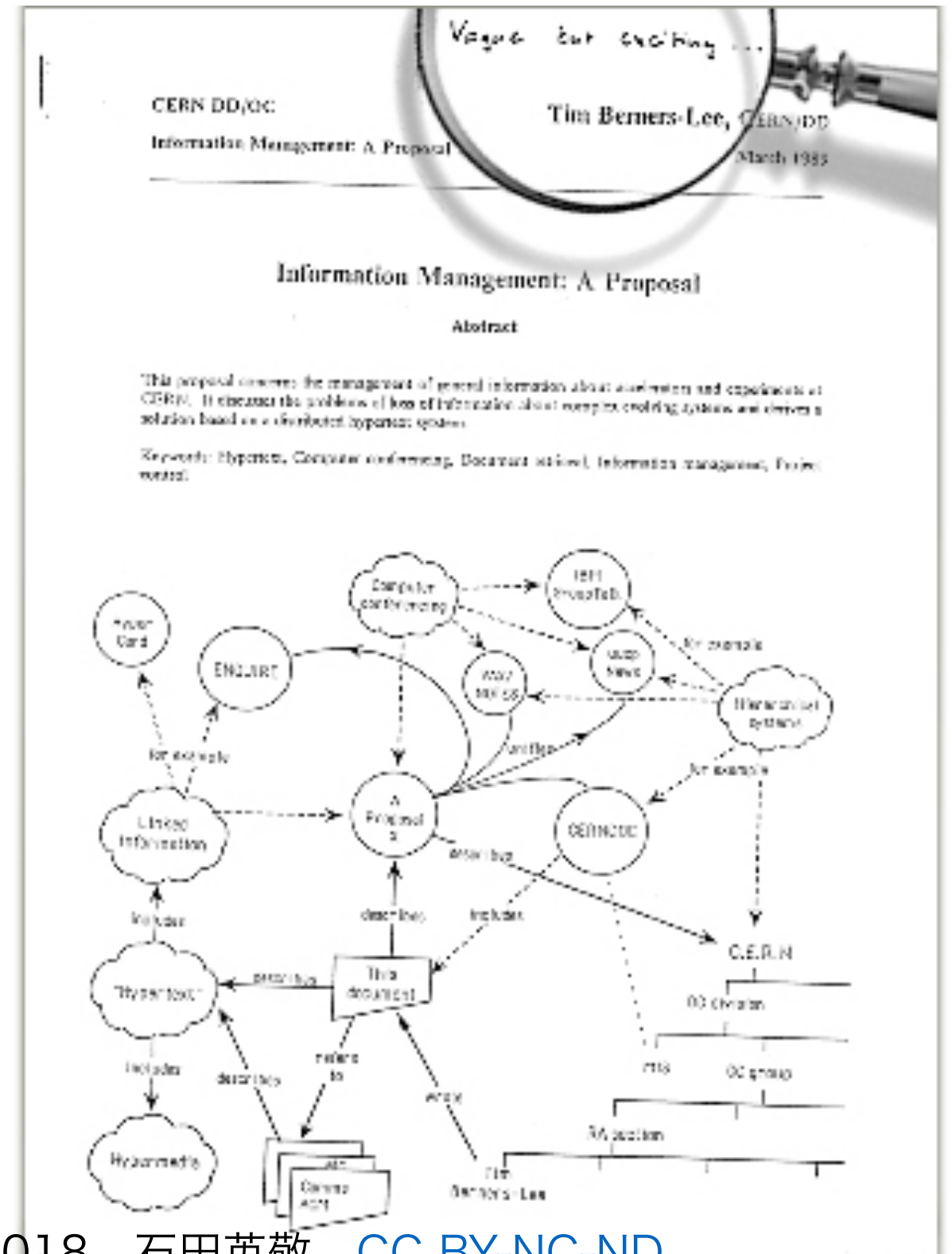
<http://info.cern.ch/hypertext/WWW/TheProject.html>

The Memex (MEMory EXtender)



Memex in the form of a desk would instantly bring files and material on any subject to the operator's fingertips. Slanting translucent viewing screens magnify supermicrofilm filed by code numbers. At left is a mechanism which automatically photographs longhand notes, pictures and letters, then files them in the desk for future reference (*LIFE* 19(11), p. 123).

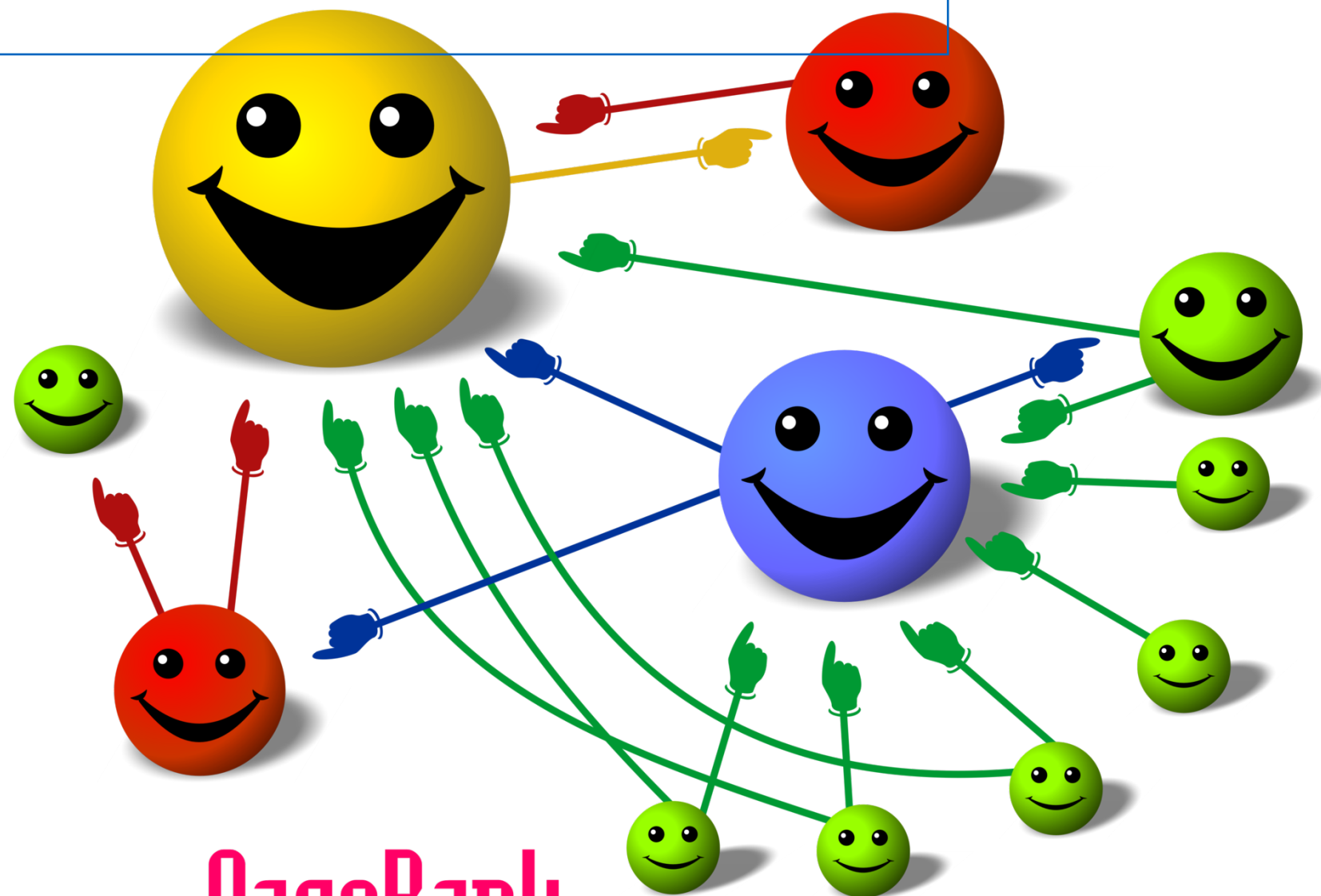
V. Bush:As we may think,LIFE,10/september/1945
p123



The Anatomy of a Large-Scale Hypertextual Web Search Engine

Sergey Brian anf Lawrence Page

<http://infolab.stanford.edu/~backrub/google.html>

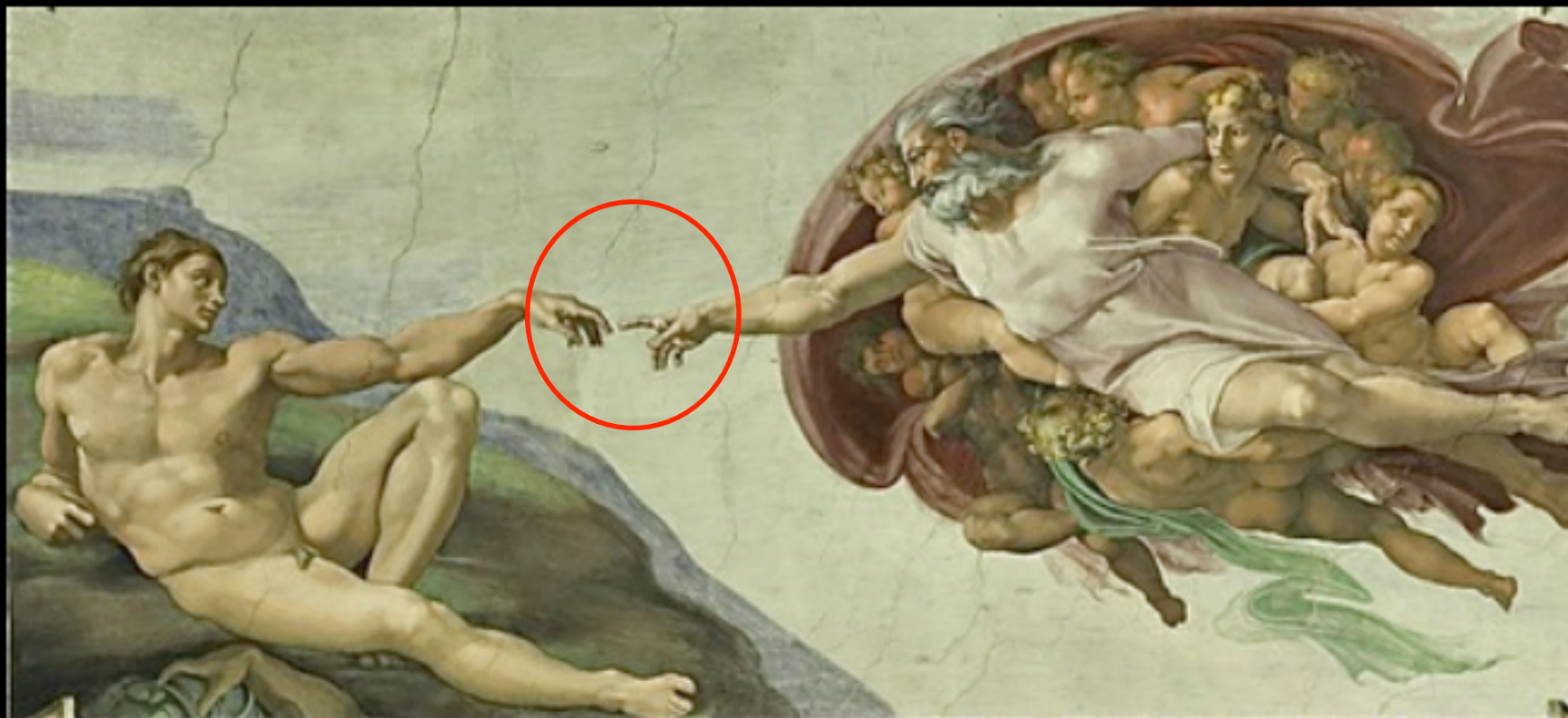


PageRank

どんな「神の指」なの？

Digital Humanitiesについて

Digitus Dei est hic !



from Wikipedia Commons

どんな「神の指」なの？

Humanitiesの「人差し指」問題



from Wikipedia Commons

親切な司書はあなたに学問を教えてはくれません！

「補助学」としてのDigital humanities

Library of Congress Classification:Class C -- Auxiliary Sciences of History

From Wikipedia, the free encyclopedia

Class C: Auxiliary Sciences of History is a classification used by the [Library of Congress Classification](#) system. This article outlines the subclasses of Class C

Contents [\[hide\]](#)

1

C - Auxiliary Sciences of History

2

CB - History of Civilization

3

CC - Archaeology

4

CD - Diplomatics; Archives; Seals

5

CE - Technical Chronology; Calendar

6

CJ - Numismatics

7

CN - Inscriptions; Epigraphy

8

CR - Heraldry

9

CS - Genealogy

10

CT - Biography

11

External links

12

Sources

C - Auxiliary Sciences of History [\[edit\]](#)

1-51 Auxiliary Sciences of History (General)

CB - History of Civilization [\[edit\]](#)

3-482 History of Civilization

156 Terrestrial evidence of interplanetary voyages

158-161 Forecasts of future progress

195-281 Civilization and race

305-430 By period

440-482 Relation to special topics

450 Geography and civilization

478 Technology

481 War and civilization

482 Water and civilization